

# 徳島県におけるカマキリの俚言考察

徳島県方言学会

森 重 幸

81  
45  
島  
51369



國立國語研究所

林文庫

# 徳島県におけるカマキリの俚言考察

徳島県方言学会 森

重 幸

- 〔I〕 概観・その他
- 〔II〕 分布・語系・俚言の考察
- 〔III〕 まとめ
- 〔IV〕 「カマキリの卵」の俚言
- 〔V〕 分布図

## 〔I〕 概観・その他

1、「カマキリ」の俚言は、全国的にきわめて多く、従来いろいろな立場から考察されてきた。

注 1. 全国螳螂方言名彙——佐藤清明

2. 螳螂考——柳田国男

3. 関東における螳螂の俚言——東条操

4. カマキリの方言分布を解釈する——糸魚川調査——徳川宗賢

2. これらは、それぞれに貴重な成果をもたらし、興味のあるヒントをしめしている

3. 本県においても、森本氏・金沢氏等によって、すでに多数の俚言が記録され、報告されていることは周知のとおりである。

注 1. 阿波方言集——森本安市

2. 阿波言葉の辞典——金沢治

4. したがって、これらカマキリ俚言の分布状況、分類、語構成などを追究することが今後の課題といえよう。

5. 本稿は、先学諸氏の成果に導かれながら、前記の諸問題について考察した試論であり、中間報告である。

6. 調査方法は、県下の高校生160人に依頼して、各出身町村（本稿では、多くの場合、旧町村名を使用している）の概況を知り、これと並行に、在地年配層を対象とする現地調査を行なった。調査地点は、約420である。とくに山地帯は俚言の多いことを予想し、おもな部落を網羅するようつとめたが、今後も漸次補っていく予定である。

7. 現在までに判明したものを分類すると、大体つぎのようである。

注 1. 表1参照

2. 分布図適宜参照

3. 分類は東条氏の方法に準じた

〔表1〕

語 系	お も な 俚 言	分 布 図
1 カ マ	カマキリ・ガンギリ・カマカケ・カマンマ・チョーナカタギ……	2・3・9
2 イ ボ ジ リ	イボジリ・エボジリ・ヨボジリ・エンボジリ・ヘンボージリ……	2・4
3 ト 一 ロ 一	トーロー・ドーロ・オガメトーロ・カマカケトーロー	2・5
4 オ ガ メ	オガメ・オガマニヤトーサン・オガミタオシ・オガンボーシ……	2・6
5 エ ン マ	エンマ・ヤンマ……	2・7
6 ホ ト ケ	ホトケムシ・ホトケンマ……	2・8
7 そ の 他	ゲンベー・テンジンザン……	2・9

これらについて順次考察していく。

## 〔II〕 分布・語系・俚言の考察

### (I) 「カマ系」

1. 「カマ系」には次のようなものがある。

注 1 表2参照

2 分布図2・3・9参照

〔表2〕

	語類	俚言
1	カマキリ	カマキリ・カマキチ・カマキリジー（サン）・カミキリ・カマウチ・カマタリコ・ ガンギリ・（カマキリトーロー）（カマキリホトケ）
2	カマカタギ	カマカタギ・カマカツギ・チョーナカタギ
3	カマカケ	カマカケ・カマタテ・カマカケジー・（カマカケトーロー）・（カマトーロー）
4	カマンマ	カマンマ・カガンマ・ガガソマ・カゲンマ

### (1) 「カマキリ類」

1. 「カマキリ」は、程度の差はあるが、地域・年令・階層のいずれをとわず全県的に通用する。

2. とくに、東部平地帯を主とする一部地方では、在地の「カマキリ俚言」がまったくない。

3. 分布図9から、「カマキリ」の一般化傾向をみると、つきのことがいえそうである。

- ① 東部平地帯
- ② 海岸地方の一部
- ③ 山中の僻地

4. 東部平地帯には、鳴門市・徳島市・小松島市などがある。

これら都市部には、「カマキリ虫」があまりいないし、実生活にも関係がない。また、現代生活の新しい要素に、もっとも早く接することなどから、共通語的なものの定着が進みやすいわけである。

5. 新しい表現・用語が多くの場合都市部に定着し、ついで都市部に接する町村部に、放射状に漸次およんでいくのが從来の傾向であるが、吉野川に沿った町村への影響力がもっとも強いという現象は一般的のようである。

また、<阿南市（椿泊）>・<海部郡由岐（伊座利）>・その他の海岸地方に、在地俚言のないことも、ほぼ理解できる。これらの地方での生活や関心は、すべて海にあるからである。これらの地方に近接する<阿南市（椿）（蒲生田）>などで「エンマ」を用いているのは、当方が農業部落であることとも考え合せて興味がある。

注 分布図2・7参照

6. 同様なことが、<海部郡海部（鞆奥）>・<海部郡宍喰（宍喰）・（竹ヶ島）>などにもいえそうである。

7. <海部郡牟岐（内妻）>・<海部郡海南（鯖瀬）>などは、農業部落であるにもかかわらず在地俚言がないようである。分布図6から推定して、「オガメ系」地方に属するはずであるが、調査が不十分であるのか、在地俚言を保持していく要素があるのかのいずれかであろう。そして、後者の場合、その一因として、小部落は、在地の俚言や古語などにくわしい老年層がいなくなってしまうような時期のあることも、大きく影響するものと思われる。

8. また、くわしく当ってはいないが、<那賀郡上那賀平谷（六丁）>その他、山中の僻地に在地俚言がないらしいことは、これら僻地が近辺地区との接触にとぼしいことに加え、前記の理由などが一因となっているのではなかろうか。

9. ところで、「カマキリ」の一般化にともない、いろいろな変化がみられる。

注 分布図3参照

「カマキリトーロー」<三好郡山城谷>・「カマキリホトケ」<勝浦郡上勝（日浦）>などは、先行語系との複合である。

10. また、「カマキリジー（サン）」<三好郡東祖谷山（久保）>・<那賀郡沢谷（川成）>・「カマキチ」<名西郡鬼籠野（青井夫）>・<美馬郡江原（冬畑）>などは、親しみやすい擬人表現である。

11. 「カマウチ」<阿南市（嶋町）・<見能林（東分）>の「ウツ」は、柳田氏が「カマウッタテ」で説明されているように、これを武器として用いる場合を意味するのであろう。

### 注 蟻螂考

本県においても、刃物を力いっぱいに用いる場合、「鎌をウチコム」・「斧をウチコム」のように表現している。「鎌で刈る」ならともかく、「鎌で切る」という「カマキリ」の不自然さよりも、「カマウチ」の方が、「カマキリ虫」の攻撃的動作にはふさわしいと感じたのであろうか。

なお、当方は新田地帯とおもわれるので、古い俚言ではなさそうである。とすれば、カマキリの定着過程にくられたものであろうか。形態からみるならば「カマカケ類」に属するが、形成過程から考えて、一応「カマキリ類」に編入した。

12. 「カマタテ」も、「カマウチ」と同じ発想形式であることはいうまでもない。ただし、これが共通語的な「カマキリ」に関連したものかどうかはよくわからない。

13. さらに「カミキリ」<鳴門市(大代)>もあるようだが、当方では、「カマキリ虫」が髪を食うという類の俗信はまったくない。また、分布図9から考えても、古語との関係はなく、逆行同化による変化とおもわれる。

14. その他、「カマタリコ」<三好郡三郷(漆川)>がある。どのような語構成によるのか、ちょっとわからない。

在地の人々に、この俚言のもつ語意識・俗信・その他についてたずねてみたい。なお、金沢氏によれば、祖谷地方で「ガンギリ」が用いられるようである。

### 注 阿波言葉の辞典

#### (2) 「カマカタギ類」

1. 「カマカタギ」は、<三好郡山城谷・三名・西祖谷山>などに小分布層を形成するほか、<美馬郡端山(長瀬)>・<那賀郡木頭(平)>などでも用いている。

2. 「カマカツギ」は、<三好郡屋間>で用いるほか、「カマカタギ」の地方でも時々聞くことがある。ちなみに、「カタグ」・「カツグ」は、ともに本県で「担ぐ」意味として一般に用いるが、「鎌を担ぐ」とは吾々の常識とちょっとずれている。なぜこのような命名がなされたのかと考える必要がある。

3. これに関連して興味があるのは、「イボジリ系」にみられる「イボジノテカタギ」である。

### 注 1、分布図4参照

### 2、イボジリ類参照

4. <那賀郡木頭・平谷・沢谷>などの年配層は、「テカタギ」を「手をもちあげる」意味に理解しており、「テカタグ」のように動詞としても用いている。そして、このような表現は前記<三名・西祖谷山>の老年層にも一般的である。

5. つまり、「カマカタギ」の本来の意味は、「鎌をもちあげる、すなわち、鎌をかまえる」の意であり、柳田氏が、「カマタテ」・「カマカケ」で説明されたことと同じ内容とおもわれる。

### 注 蟻螂考

6. 「チョーナカタギ」も同様である。「チョーナ」は「手斧」であり、本県では両手で用いるものをさしている。その持ちはこびは、肩にかつぐのが普通で、この点「カタギ」の意味が「担ぐ」場合でも吾々には不自然ではない。

7. 柳田氏は、「チョウナカタギ」の類が命名されたのは、そう古いことではないとされているが、「カマキリ類」との関係はどうなのであろうか。ということは、「カマカタギ類」が、共通語的な「カマキリ類」の一般化につれて、「カマキリ類」から変化したものか、あるいは、「カマキリ類」が進入する以前に、すでに用いられていたものかという問題である。これについては後記する。

### 注 1 (II) 「イボジリ系」4~6参照

### (IV) の(4)「オガソボーシ類」12~21参照

#### (3) 「カマカケ類」

1. 「カマカケ類」は、三好郡西部地方を中心に、中央山地帯に散在している。

2. とくに、「カマカケ」は、<三好郡三郷・山城谷>などに小分布層を形成し、「カマカタギ類」の分布層の下流地方で共存する場合もある。

3. 柳田氏によれば、『「カマカケ」は、「鎌掛」、つまり、「カマキリ虫」が斧を高く上げて木草の間に渡るようすを見立てたもの』とされている。

4. 本県の場合をみると、「カマカタギ類」は前記したように、本来は、鎌を高く上げる意であるので、これと共に存する「カマカケ」も柳田氏の説かれる概念があったものと思われる。しかし、現在、在地の人々は、むしろ「鎌で他をひっ掛ける——攻撃する動作を想像した命名」と意識する場合が多い。「カマカタギ」の語意が、「鎌を高く上げる」意から、「鎌を担ぐ」意にずれたように、「カマカケ」も「鎌を高く上げる」意から、「鎌で攻撃する」意にずれたとみるべきであろうか。その他、いろいろな場合を検討せねばならないが、いずれにしても、「カマカタギ」の「鎌を担ぐ」という、多少現実にあわない「ずれ」を補うために「カマカケ」が用いられたのである。
5. なお、前記地方では、「カマカケトーロー」・「カマキリトーロー」などの複合型を派生している。また、「カマトーロー」<山城谷(光兼)>もみられる。分布相からみて、「カマカケトーロー」の簡略ではなかろうか。
6. その他、「カマカケジー」<美馬郡八千代(猿飼)>のような擬人表現もみられる。
7. ところで、「カマカケ類」と「カマキリ類」との関係についても、「カマカタギ類」の7でふれた問題があてはある。

#### (4) 「カマンマ類」

1. 「カマンマ類」は、全国方言辞典、その他によても他県にはないようだ、本県においても三好郡、美馬郡、名東郡の一部に散在するにすぎない。つまり、「カマンマ類」の存在するという可能性、または形成されるという可能性には、特殊な条件があったとおもわれる。
2. そこで、これらの地方に共通な要素を概観し検討すると、つぎのようになる。
  - ① 本県の奥地帯にはまったくない。これは、山地深く定着した古い語系が、「カマンマ類」と一応関係のないことをしめしている。
  - ② 小河川をさかのぼった、やや不便な地方で用いる。このような地方が、「カマンマ類」にとって、どのような意義をもつか十分にはわからないが、ことばの伝播の面からみれば、その大きな通路からはずれた片すみにあたる。また、このような片すみは、新旧のことばが長く共存する可能性があり、したがって、局地的な新語形成のみこみが高い。
  - ③ 「カマンマ類」のすべてが「ホトケ系」の地方にあり、「イボジリ系」・「エンマ系」の地方にはない。また古老が「オガメ系」を伝えている場合も一ヵ所ある。これは、「カマンマ類」が他から伝播したとみるよりも、むしろ、「ホトケ系」と関連して局地的に形成されたことを意味する。さらに、この形成に「オガメ系」が関係する可能性もあり得ると思われる。
3. 以上のこと考慮し、「カマンマ類」のそれぞれをみていきたい。
4. 「カゲンマ」は<三好郡三郷(漆川)>だけで用いる。当地は、「オガメ系」はないようだが、分布図2・3・8で明らかなように、「ホトケンマ」分布の最前線であり、同時に「カマカケ類」分布の最後尾でもある。つまり先行分布していた俚言「カマカケ」と後続して登場した「ホトケンマ」との混用地点にあらわれたのが「カゲンマ」である。このような特殊性をみると、その形成はつぎのようになされたと推定される。

カ マ カ ケ  
ホ ト ケ ン マ } → (カケンマ) → カゲンマ

5. 当地方をふくめて、「ホトケンマ」は「仮の乗る馬」・「仮の使い」のように意識されるのが一般的であり、また、「馬」はウマ(uma)でなく、ンマ(nma)と発音されている。いずれにしても、ンマを抽出する可能性は十分にある。
6. 一方、「カマカケ」のカケについては前記したが、要するに、両者の特徴的なものが結合して新語となつたのであろう。つまり、コンタミネーションによって生じた「カケンマ」が、発音容易な「カゲンマ」に変化したとみてよい。
7. 「カマンマ」も、<美馬郡江原(御所野)、(金川)>にかぎられている。当地方は、曾江谷川支流の最上流部で、「カマキリ」・「ホトケンマ」が一般的であるが、さらに、古老が「カマンマ」・「オガソマ」を伝えている。
8. 「オガソマ」については「オガメ系」で後記するが、「カマンマ」は、これらの混用の中から派生したものと思われる。

その形成については、つぎの二つの場合が考えられる。

Ⓐ カマ系  
ホトケンマ

Ⓑ カマ系  
オガソンマ

9. このいずれであるかは、よく分らないが、特徴的なカマとンマとのコンタミネーションである。あるいは、Ⓐ・Ⓑの両者から成立する可能性も十分にある。

10. 「カガソンマ」は、<美馬郡岩倉(平帽子)>だけである。当地方も吉野川支流の最奥地にあり「カマキリ」・「ホトケンマ」・「カガソンマ」を混用している。

11. 前記「カマンマ」に比較的近い地方にあるので、おそらく同一形成過程によるものと思われる。そこで、つぎの場合を想定してみた。

Ⓐ カマ系  
ホトケンマ

Ⓑ カマ系  
オガソンマ

Ⓒ カマ系  
オガソンマ

12. Ⓐ・Ⓑは、コンタミネーションによって、まず「カマンマ」を派生し、さらに発音容易な「カガソンマ」に変化する過程である。またⒸは、ただちに「カガソンマ」を形成する方式である。当地方には、「オガメ系」はみられないが、分布図6で明らかなように、本県は木頭地方をのぞいて、すべての河川流域に「オガメ系」が伝播していったことがうかがえる。

13. また当地に近く、かつ地形条件が類似する<江原>——前記カマンマの地点——から考え合わせると、Ⓑ・Ⓒの想定も不可能ではない。

14. 「ガガソンマ」は、<名東郡佐那河内>・<徳島市八多(犬飼)>などで用いている。その形成は、「カガソンマ」からの変化であろう。

15. ところで、「カガソンマ」の形成は前記の三方式が想定されたが、当地方の「ガガソンマ」は、そのいずれから変化したのであろうか。

16. 当地方も小河川の上流にあるが、他の「カマンマ類」分布地方と異なる点は、徳島市・小松島市などの都市部にやや近い点である。

17. このことは、俚言分布の上で考えるならば、分布図2・8・9で明らかなように、当方が、「カマキリ」定着地帯の最前線部にあり、「ホトケンマ」分布の最後部地方であるということである。

18. さらに、分布図6からあきらかなように、当地が「オガメ系」分布地方とはるかに離れているという事実も加わってくる。

19. 以上のことから、「ガガソンマ」の形成は、「オガメ系」とは関係がなく、先行俚言「ホトケンマ」と後続してきた「カマキリ」とのコンタミネーションによるものとおもわれる。つまり、「カガソンマ」形成におけるⒶの方式がさらに展開して、「ガガソンマ」になったのであろう。

20. いずれにしても「カマンマ類」は「カマ系」と他の語系(多くは「ホトケ系」)とのコンタミネーションによって派生した第二次的語類といえる。

## (II) イボジリ系

1. 「イボジリ系」は、すでに平安時代の文献にしめされる古語である。本県では那賀郡奥地、三好郡山地などに分布している。

2. 河川の最上流地方で、しかも老年層に使用される(若い世代は知らない場合が多い)ことからみて、本県における、もっとも古い語系とおもわれる。

3. 多数の用語があるが、これをまとめると、つぎのようになる。

注 1. 表3参照

2. 分布図2・4参照

〔表3〕

	語類	俚言
1	イボジリ	イボジリ・イボジ・イモジリ・イモジ・イボジノテカタギ
2	エボジリ	エボジリ・エボジ・エモジリ・エモジ・エボジノテカタギ
3	ヨボジリ	ヨボジリ・ヨボジ・ヨモジリ・ヨモジ
4	エンボジリ	エンボジリ・エンボージリ・エンボージ・エンボオジ・エンボーズ・エンボ・オ
5	ヘンボジリ	ヘンボージリ・ヘンボー

4. 「イボジリ類」・「エボジリ類」・「ヨボジリ類」などは那賀郡側に、「エンボジリ類」・「ヘンボジリ類」などは三好郡側に分布する。
5. なお、「イボジリ系」には、古文献にみられるのと同様な俗信が多い。  
たとえば、<那賀郡木頭（折字）>では『「カマキリ虫」の黒焼をつけるとイボがおちる。』<那賀郡木頭・上那賀・木沢>などの各地では、『「カマキリ虫」のカマでイボを撫てる（つまり、カマで刈る）とよい』などである。  
当地方に、「エボジリ」・「ヨボジリ」などの変化語類のみられるのも、イボをエボ・ヨボなどとする訛語のことと一致している。
6. このような俗信は、三好郡側山地では、はっきりとは伝わっておらず、黒焼がなにに効くかはよくわかっていない。そして、「イボジリ系」に対する、他の俗信がみられるのも興味がある。つまり、当地方では、『ヘンボは尾の意であり、交尾中に「カマキリ虫」の雌が、雄を、その尾部より食い殺すという習性につけた表現である』との説明である。しかし、実際には、雄は上体部より食い殺されるのが一般的のようである。また、当地方では、通常シリ（尻）を用いないで、ツベ（臀）を用いることからも、この付会が事実を知らない人による、比較的新しいものだと想像できる。なお、十分な調査ではないが、当地方では、イボをエボと訛るが、エンボ・ヘンボには訛らないようである。
7. 以上のように、三好郡側山地は、那賀郡側山地に比較すると、俗信の面でも、語類の訛り方にしても、その変化の早かったことがわかる。このことは、後続する語系と、その分布状況に那賀郡以上の変化をもたらしているようである。

注 「カマキリ虫」の黒焼が腎臓・夜尿・結核・脚気などに効果があるとの俗信も各地で聞かれた。

#### (1) 「イボジリ類」

- <那賀郡木頭・平谷・坂州>などに分布する。ただし、<坂州・沢谷>などでは、「ヨボジリ類」が主となっている。<中木頭（海川）・平谷>などでも、「エボジリ類」の使用が比較的多い。
- 同一地点で、「イボジリ」・「イボジ」・「イモジ」などが共用されているのは、本来の語意が漠然となり、語形変化が進んでいることを意味する。
- <木頭（出原）・平谷（平谷）・（坂州）>などの中心聚落地では、「イボジリ系」の全語類を通じて使用度がきわめて低い。また、最奥地である<沢谷（岩倉）>では、「イボジリ系」が全然用いられない。
- その他、「イボジノテカタギ」が、<木頭・上木頭・平谷>各地の年配層に用いられることがある。テカタギとは「（両）手をもちあげること」で、『「カマキリ虫」は親に手をふった——暴力をふるったので、あのように、いつも手をもちあげたままになったのだ』との俗信がある。当地方の年配層は子どもの腕白な行為を注意する時、『「イボジノテカタギ」のようになるぞ』ということがある。

#### (2) 「エボジリ類」

- 「イボジリ類」の音変化である。前記地方に分布するほか、<那賀郡宮浜>の辺地より地方でも年配層が用いている。
- また、<海部郡川上（樺木屋）>で古老が「エボジリ」を伝えており、さらに、<勝浦郡福原（八重地・田野々）>でも古老が「ベボジ」を知っている。したがって、これらの地方に「イボジリ系」が伝播していったことは確か

である。

3. なお、<那賀郡上木頭（海川）>、その他の各地で、「エボジノテカタギ」が用いられる。
4. ところで、前記<那賀郡上木頭・平谷>・<勝浦郡福原（八重地・田野々）>などでは、「エボジリ類」が「カマキリの卵」の俚言としても用いられる。この傾向は、「イボジリ類」・「ヨボジリ類」・「エンボジリ類」すべてに共通するもので、古老に少なく、若い世代に多い。つまり、語意がぼやけて、「イボジリ系」が他のことばの意味に変化していく過程をみせている点、興味深い。これについては後記する。

注 「カマキリの卵」の俚言——「イボジリ系」参照

また、前記したように、山地の聚落地を中心に「イボジリ系」が使われなくなる傾向を考え合わせると、この語系が、二つの面から埋没しかけている事実をとらえることができる。

#### (3) 「ヨボジリ類」

1. <那賀郡沢谷・坂州>などに分布する。
2. 当地方では、イボをヨボと訛ることについては前記した。  
注 (II) 「イボジリ系」・5参照
3. その他の傾向は、「エボジリ類」の場合と同じである。

#### (4) 「エンボジリ類」

1. <三好郡東祖谷山・西祖谷山・三名>などに分布し、さらに<佐馬地・三繩・箸蔵>などの一部でも古老が伝えている。
2. 「エンボジリ」・「エンボージリ」が一般的であるが、音の脱落・擬人化などによる変化が多い。  
つぎのようなものがある。
  - イ) 「エンボージ」——東祖谷山（西山・今井）・西祖谷山（小祖谷）
  - ロ) 「エンボオジ」——東祖谷山（中上・久保）
  - ハ) 「オンボオジ」——東祖谷山（中上）
- ニ) 「エンボーズ」——佐馬地（馬地・上野呂内）
- ホ) 「エンボー」——箸蔵（下野呂内）
3. このような擬人化的変化は「カマキリの卵」を古語で「オオジガフグリ」といい、本県でも「オジフグリ」・「ジーノキンタマ」などと呼んでいることとも関係があろう。
4. 注目されることは、「エボジリ類」と同じく、「エンボジリ類」が<三繩・佐馬地・箸蔵（下野呂内）などで「カマキリの卵」にも用いられることである。そして<佐馬地・箸蔵>では使用度がきわめて低くなっている。また<山城谷>では「エンボジリ類」が「カマキリの卵」の俚言として完全に転化している点などである。
5. このような傾向は、平地帯が外部と接触しやすいうことにもよるが、従来、交通の不便だった<山城谷>の場合は他の原因も考えられる。これについては後記する。  
注 (III) 「オガメ系」参照
6. また、「エンボジリ類」の衰退が山地の中心聚落、たとえば<東祖谷山（京上）・西祖谷山（櫟生）>などにもめだっていることはもちろんである。これら山間聚落地は、店舗がひらけ、外部との接觸地点であること、多くの村外移住者がいることなどによるのはいうまでもない。

#### (5) 「ヘンボジリ類」

1. 「エンボジリ類」からの転訛によるものであろう。<三好郡東祖谷山（落合・櫻尾）・三名（平）などで使用している。
2. <東祖谷山（京上）>・<三名（平）>などで、「ヘンボー」のように省略する場合もある。
3. その他、俗信については前記した。  
注 (II) 「イボジリ系」6参照

4. ところで、分布図2・3で不審に思われることは、<那賀郡沢谷（岩倉）>・<三好郡三名・山城谷（栗山・平野）>など、本県の最奥地に「カマ系」があるという点である。つまり、「カマキリ類」の進入以前に、いわゆる「古いカマ系」があったかどうかの問題である。
5. 前記したように、<三好郡佐馬地・山城谷・三繩>などで、「イボジリ系」が「カマキリの卵」の俚言に転化していることを考えると、当地方の「カマ系」は、「イボジリ系」の分布層の上に新しく定着したものといえよう。
6. したがって、いわゆる「古いカマ系」があるとすれば、これが「イボジリ系」以後に形成される可能性があるかどうかの問題になってくる。これについては後記する。

注 (Ⅲ) の(4)「オガンボーシ類」12~21参照

### (Ⅲ) 「トーロー系」

1. 「トーロー系」には、つぎのようなものがある。

注 1. 表4参照

2. 分布図2・5参照

〔表4〕

	語類	俚言
1	単独型トーロー	トーロー・トーロ・ドーロ
2	複合型トーロー	オガマノトーロ（-）・オガメトーロ（-）・カマカケトーロ（-）・カマキリトーロ（-）・カマトーロ（-）

2. 「トーロー」系が全語系の中でしめる位置は、分布図からはとらえにくい。これは、中央山地における分布相が個性的にあらわれないからである。しかし、本県西部の<三好郡山城谷・三名・三繩>などで、「トーロー系」が「イボジリ系」分布層の周辺地方と重なっており、海部川流域では、「オガメ系」の最前端と重なって、「イボジリ系」<海部郡川上（櫻木屋）>を圧迫して行った形跡がうかがわれる。また、<那賀郡木頭・上木頭>などでは、「オガメ系」に先行して、「イボジリ系」の分布層の中に散在しているようである。
3. 以上のことから、「トーロー系」は、「イボジリ系」に相前後するものと一応推定されるが、今後くわしく調査してゆきたい。

#### (1) 「単独型トーロー」

1. 「トーロー」・「トーロ」は、話の場で、どちらにも発音される。海部郡では、「トーロ」と短かいようである。
2. 中央山地帯に散在するものは、使用度がきわめて低い。
3. <那賀郡木頭>では、古老が「ドーロ」を用いていたようである。

#### (2) 「複合型トーロー」

1. 「カマ系トーロー」は<三好郡山城谷・三繩>などに、「オガマノトーロー」は<三好郡山城谷（大谷・茂地）>に、「オガメトーロー」は<海部郡川中上流地方>などに、それぞれ分布している。
2. これらの地方では「単独型トーロー」も用いるが、「複合型トーロー」の方が一般的で、年配層は比較的多用している。
3. 「単独型トーロー」の使用度が低く、「複合型トーロー」の分布層にしても、わずかに県西部と県南部とに露頭しているにすぎないという現象は、なにによるのであろうか。
4. これは、「トーロー」が漢語であるという特殊性、つまり、在地の人々には実感にとぼしく、生き生きとした方言生活に適さなかったことを裏づけているのであろう。
5. 「トーロー系」は他の語系（先行または後続の）と結合して使用されるか、そうでなければ急速に衰退していく運命だったのである。
6. 「複合型トーロー」が本県の西部と南部とで、わずかながらも分布層を形成し得たことと、中央山地帯において、「単独型トーロー」が衰退していることは、この特殊性がしめた楯の両面である。

### (Ⅲ) 「オガメ系」

- 「オガメ系」は、『「カマキリ虫」が前脚の鎌をかまえる動作を挙げた擬人表現』である。
- 「オガメ系」地方の中年層以上の人々は、「オガメ」・「オガマナトーサン」などと言って、「カマキリ虫」を遊びに使った少年時代の記憶を持っている。
- 分布図からわかるように、「オガメ系」は、<那賀郡木頭・上木頭・沢谷>などの「イボジリ系」地方をのぞく中央山地帯、および、やや交通不便な<海部郡地方>、その他で用いる。
- 分布相からみて、「トーロー系」に続き登場したとおもわれる強力な語系である。また、他の語系と比較して分布層の広いことは、この即物的表現が方言生活に適していたことをものがたっている。
- したがって、俚言も多いが、一応つぎのようにまとめてみた。

注 1. 表5参照

2. 分布図2・6参照

〔表5〕

	語類	俚言
1	オガメ	オガメ・オガモ・オガマッショ・オガマッチョ（オガメトーロー）
2	オガマ	オガマニヤトーサン・オガマナトーサン・オガマノトーサン・オガマノトノサン・オガマトーサン・オガマ・オガム（オガマノトーロー）
3	オガミ	オガミタオシ・オガミト（一）シ・オガミド（一）シ・オガミンド・オガミ・オガミムシ
4	オガンボーシ	オガンボーシ・オガンボ
5	オガムシ	オガムシ・オガ

### （1）「オガメ類」

- 「オガメ類」は、「カマキリ虫」に直接要求した表現である。
- 「オガメ」は、<美馬郡八千代（猿飼）>以外は、すべて海部郡に分布する。  
<海部郡牟岐・三岐田>では、年配層が比較的多用している。
- 「オガメトーロ（一）」は、海部川流域に分布する。当方では、「オガメ」・「トーロー」を別個に使用する場合もあるが、「複合型」が一般的である。中、上流地方の年配層は比較的多用するが、<川東・川西>など、下流の聚落地では、老年層もあまり用いない。
- 「オガモ」<海部郡三岐田（木岐）>は、「オガメ」の不完全同化ともみられるが、本県では、目下の相手を促がす表現として、「行こう」→（行きなさい・行け）、「拝もう」→（拝みなさい・拝め）などのように将然形を用いている。「オガモ」の成立も、むしろ、後者の意味によるとおもわれる。
- 「オガマッショ」<三好郡東祖谷山（高野・和田）>、「オガマッチョ」<三好郡西祖谷山（徳善・西岡）>は、年配層によれば、いずれも、少年層がおもに用いていたようである。  
その語形成には、つぎの四つの場合が考えられる。

- ① オガマセヨ→オガマッショ      ② オガミマセヨ→オガマッショ  
 ③ オガマンセヨ→オガマッショ      ④ オガマッシャレヨ→オガマッショ

- ①は「拝ませよ」であり、少年たちが「カマキリ虫」をとりかこんで「拝ませよう」として、いじめる姿が想像される。つまり、使役的な命令表現である。
- ②は、「拝みませよ」であり、「カマキリ虫」にていねいにというより、親しみをこめてもとめた表現である。当方では、現在でも年配層の間では「オイデマセ」——「おいでなさい」とか、「オトリマセローヤ」——「おあがりなさいよ」などの表現が用いられていることから、このような形成も十分考えられる。とくに、前記（高野・和田）に、「オガミ」のあることは、②から成立したとの可能性を強めている。
- ③は、「拝まんせよ」である。この用法は、現在、<東祖谷山（深渕）>をのぞくと、祖谷地方では用いないようである。しかし、本県東部・南部の広い地方で、親しみのある表現として比較的多用されているので、当方にもかつてはあったのかもわからない。ただ、この場合問題となるのは、「オガマンショ」とはなっても、さらに

「オガマッショ」になれるかどうかである。

9. ②は、「拝まっしゃれよ」である。中央山地帯では、尊敬ないし親愛の表現として、「シャル」・「サッシャル」が比較的多用されていて、当地の年配層もこれを用いている。しかも、「オガマッショ」と促音も共通しており、②からの可能性も考えられる。
10. 以上を考え合わせると、①・②・③からの変化がありえるが、そのいずれであるかは、よくわからない。なお、②・③は、「マス」・「シャル」による、「ていねい」ないしは「尊敬」の表現であるが、「拝む」ということは自体が神聖な概念であるため、このような表現の可能性も十分にあり、いちがいに捨てきれない。「オガマッショ」については、今後よく検討してみたい。
11. 「オガマッチョ」は、「オガマッショ」の変化であろう。幼少年たちにおこりやすい訛り現象である。
12. ところで、「オガマッショ」と「オガマッチョ」は、それぞれ、祖谷川、吉野川の沿岸にあり、両地点はかなりへだたっている。おそらく、両地方を結ぶ地域に分布層があるはずだが、今後の調査にゆずる。

### (2) 「オガマ類」

1. 「オガマニヤトーサン」・「オガマナトーサン」は、「拝まねば通さぬ」の意で、条件をつけて要求した表現である。祖谷川・貞光川・穴吹川・那賀川など、「オガメ系」のほとんどの地方に分布している。
2. 「オガマノトーサン」は、<三好郡西祖谷山・三名>などで多用されている。分布相からみて「オガマナトーサン」から派生したとみてよいが、意味の上では、「拝む」→「お鎌」へ、「通さん」→「父さん」へと実質的な展開がみられる。これらの地方では、「お鎌」・「大鎌」・「雄鎌」というものはないが、鎌の種類として、「エガマ」・「ウスガマ」・「キシガマ」・その他、いろいろあるので、「カマキリ虫」の特徴的な前足と強い闘争性をあらわすことばとして、「オガマ」の連想は容易に可能である。在地の人々は、「オガマノトーサン」によって「拝まの父さん」・「お鎌の父さん」などを同時に意識している。
3. 「オガマトーサン」<三好郡三名(下名)>は、分布相からみて「オガマノトーサン」の省略である。在地の人々も、「オガマノトーサン」と同じ語意識を持っている。
4. 「オガマノトノサン」<三好郡東祖谷山(和田)・西祖谷山(有瀬)>も、分布相からみて「オガマノトーサン」の展開であろう。「父さん」は、さらに「殿さん」へとおもしろく連想されている。
5. 「オガマノトーロー」<三好郡山城谷(大谷・茂地)>は、「オガマノトーサン」と「トーロー」の複合である。
6. 「オガマ」は、県下各地に散在しているが、いずれも近辺に「オガマナトーサン」のあることからみて、その省略形とみてよい。この場合も、「拝む」→「お鎌」への語意変化がなされている。
7. 「オガンマ」は、<美馬郡江原(御所野・金川)>の古老が伝える以外は、すべて那賀川水系地方である。  
<那賀郡宮浜>では、「オガマ」・「オガンマ」のあることからみて、「オガマ」の鼻音化によって「オガンマ」のできたことがわかる。また、<海部郡赤河内(原尻)>は、現在「エンマ系」地方であるが古老が「オガンマ」を伝えている。このことから、那賀川下流の「エンマ系」地方にも同様に「オガンマ」のあったことが推定される。

### (3) 「オガミ類」

1. 「オガミ類」は、県下各地に散在しているが、使用度はあまり高くない。
2. 「オガミムシ」<美馬郡一字(須貝瀬)>、「オガミ」<三好郡東祖谷山(和田・高野)>などは、それぞれ在地老年層が伝えている程度である。
3. 「オガミタオシ」<那賀郡平谷(成瀬)・坂州(出羽・木頭名)>は、「拝み倒し」の意とする在地の人々がいる。すると、「オガミト(一)シ」、「オガミド(一)シ」などは、その変化型であろうか。この場合の語意は、はっきりしないが、「拝み通し」を当てる人もいる。しかし、いずれにしても、俚言の表現形式としては、あまりにもすっきりしすぎており、大人の命名としても問題点がありそうなので、「オガミンド(一)」とともに再検討したい。
4. 「オガミンド(一)」<海部郡浅川(伊勢田)>は、前記「オガミド(一)シ」の省略のようでもあるが、両者が距離的にあまりにもへだたっているので決定的でない。
5. ところで、本県では、つぎのような俚言を用いることがある。

「アリンゴ」——「蟻」

「タニンゴ」——「谷」

「ビキンド」——「蛙」

「ガニンド」——「蟹」

「オガミンド」は、これにならった接尾語的なものともおもわれる。

6. とすると、当地方は「オガメ類」に属しているので、はじめは、「オガメント」だったとみてよい。

7. 「蛙」・「蟹」・「カマキリ虫」などは、少年達の一時の遊び相手として恰好なものであり、そこに共通した接尾語がつくことも考えられる。

8. しかし、「ビキンド」や「ガニンド」の分布が、本県において比較的広いらしいのに、「オガミンド」だけが当地に限られているのは何故であろうか。これは、その形成が「オガメント（-）」→「オガミンド（-）」によるとしても「蛙」や「蟹」の場合と性格が異なることをしめすのであろう。

9. そこで、「オガミンド」について、分布図6から考えられることは、海部川流域を主とする、いわゆる「下灘地方」の「オガメトーロー」との関係である。

10. 現在、<浅川>では「トーロー」を用いないようであるが、近接する<川東（大里）>の年配層が知っており、下灘地方にも一般的であることからみて、当地にも「トーロー系」のあったことは十分考えられよう。

11. とすると、「オガミンド（-）」は、「オガメトーロー」から「オガメント（-）」を経てできる可能性もあり得る。しかし、「オガメトーロ（-）」が「オガメント（-）」に変化するには飛躍がありすぎるようでもある。

12. ここで、「オガミンド」と関連があるとおもわれる、前記「オガミド（-）シ」・「オガミト（-）シ」について再検討したい。

13. 那賀郡山地の「オガメ系」は、「オガメ類」と「オガマ類」があるが、分布相からみて、「オガマ類」は那賀川をさかのぼったものと思われる。すると、「オガミ～」の類はどこから流入し、どうしてできたのであろうか。

14. これについて考えられることは交通関係である。従来、<那賀郡平谷・上木頭・木頭>は1950年（昭和25年）まで<海部郡>に属しており、1930年代まで、生活物資の多くが海部川をさかのぼって峠越しに運搬されたようである。

注 1. 海部木頭山地における断層谷通路と交通概観——四国地理学会論文集（1934）

2. 木頭村誌

15. したがって、<平谷>地区の「オガミ～」の類も、<海部郡浅川（伊勢田）>の「オガミンド」の形成と同様、海部川流域の「オガメ類」と関連することが予想される。<那賀郡坂州（出羽・木頭名）>の「オガメ」や「オガミトーシ」は、海部川から流入した「オガメ類」の最先端部であろうか。

16. こうみると、「オガミト（-）シ」・「オガミド（-）シ」は、一応、「オガメト（-）シ」・「オガメド（-）シ」だったと推定されるし、前記<浅川（伊勢田）>の「オガミンド（-）」とも多少の関係はありそうである。

17. 一方、<上木頭・木頭>に「トーロ（-）」・「ドーロ（-）」が散在していたらしいことは、分布図5から予想できるが、これが、「オガメト（-）シ」の類と直接関係するかどうかは「オガミンド」の場合と同様に不明である。

18. それよりも、当地方で「……ト（-）シ」・「……ド（-）シ」に関連することばは、むしろ、「トドシイ——早い」であろう。つまり、「オガミト（-）シ」・「オガミド（-）シ」は、「オガメトドシュー」、つまり「拝め早く！」からの変化とおもわれる。トドシ（ュ）ーは、現在も那賀川中上流部で多用されており、「トーシ（ュ）ー」のようにも発音されている。

19. 海部郡下灘地方においても、「ト（-）ドシイ」を年配層が知っていることを考えると、「オガミンド（-）」の場合も、「オガメト（-）ドシ（ュ）」からできたとみるのはどうであろうか。

20. ちなみに、本県では、「鶏」を呼ぶことばも、幼児に用便させる場合も、「トットー」であり、雀などを追っぱらうことばも「トーアイ」である。したがって、「ト（-）ドシー」の語尾が簡略化して用いられても不思議ではない。あるいは、最初から、「ト（-）ドシー」ではなく、この「トシ」から変化したらしい「トー」が用いられていたかもわからない。

21. いずれにしても、「拝み倒し」や「拝み通し」のように、すっきりしているが、かえって不自然な解釈よりも、「拝めとどしう」のもつ素朴さの方が、分布相にもふさわしく、俚言としてもわかりよいのではなかろうか。

22. この場合、「オガメトーロ（-）」のような複合型が進入し、これが訛って、「オガメトドシュー」を「オガメト（-）シ」から「オガミト（-）シ」へとますます誘発する可能性は十分にあり得よう。

23. こうみると、「オガミタオシ」から「オガミト（一）シ」・「オガミド（一）シ」ができたのではなく、その逆に成立していったことがわかる。そして、「オガミタオシ」だけが、後人の付会した「拝み倒し」という、大人の命名になるわけである。

#### （4）「オガンボーシ類」

1. 「オガンボーシ類」は県北山地にかなり広い分布層をもち、県南一部にも散在するという、特殊な分布状況である。

2. 分布相をみると、県北部の「オガンボーシ類」が、祖谷川、貞光川、穴吹川の三河川にまたがっているのは、当地方の交通関係が一因をなしているとおもわれる。とくに祖谷地方は、1919年（大正9年）の祖谷街道＜池田一三郷（出合）一西祖谷山（櫟生）一東祖谷山（久保）＞開通までは、つぎのような峠越し交通であった。

- ① 「水ノ口峠」 (1116m) → 「井ノ内谷」へ
- ② 「吾橋峠」 (921m) } → 「三名」へ  
「西岡峠」 (778m)
- ③ 「落合峠」 (1516m) → 「棧敷峠」 (1021m) → 「三庄」へ
- ④ 「小島峠」 (1380m) → 「一宇」へ
- ⑤ 「見ノ越峠」 (1470m) → 「木屋平」へ
- ⑥ 「京柱峠」 (1158m) → 「高知県豊永」へ

このうち、「小島峠」が藩政以来明治にかけて主幹線であったことは、郷土史のしめすところであり、行政面でも、1950年（昭和25年）まで美馬郡に属していたことも周知のとおりである。

つまり、＜東祖谷山（菅生）＞は祖谷地方の入口として、＜美馬郡一宇＞と密接に関係していたのである。

「見ノ越峠」も、南北朝時代の阿波山岳武士以来の通路として知られており、現在も＜一宇、木屋平（大合）＞の血縁関係はかなりある。

3. 県北地方の「オガンボーシ」分布層が密接に関係し合ったものであり、那賀川地方の「オガンボーシ類」も＜那賀郡（宮浜）＞にかぎられていること、さらには全国的にも用例のないことなどを考えると、「オガマ類」などとは異なり、これが地区的に形成されたものとみる方が妥当である。

4. ところで、「オガンボーシ」は「オガミボーシ」＜東祖谷山（西山）＞から明らかなように、「拝み法師」と意識する人が多い。

「オガンボ（一）」も「拝ん坊」と理解されている。

＜美馬郡一宇＞は、「オガンボーシ」を多用し、「オガンボ（一）」も少用しているので両者は同じ形成過程をもつこと明らかである。

5. そこで、県北、県南の「オガンボーシ類」地方に共通な要素をあげると、つぎのようである。

- ① 「オガマ類」がある。
- ② 「イボジリ系」がある。または、これに近接している。

6. これを具体的にみると、県北部「オガンボーシ類」地方には「オガマナトーサン」があり、県南部「オガンボーシ類」地方には、「オガマナトーサン」・「オガマ」・「オガンマ」などがある。

また、「イボジリ系」についてみると、＜三好郡東祖谷山（西山・久保）＞などには、「エンボージ」・「エンボオジ」・「エンボジリ」などがあり、＜那賀郡宮浜（谷山・轟）＞などには、「エボジリ」・「エボジ」などがある。

7. 以上から、「オガンボーシ類」は、つぎのように形成されたとおもわれる所以である。

##### ① 県北部

オガマ類  
エンボジリ類  
エンボージ } → オガンボーシー → (オガンボ)

##### ② 県南部

オガマ類  
エボジリ類  
エボジ } → (オガンボシ) → オガンボ

8. いずれも、先行の「イボジリ系」と後続の「オガマ類」とのコンタミネーションによる、二次的派生語であり、この点「オガンボーシ類」は前記各語類と区別されるものである。
9. なお、「オガンボーシ類」が県北部に広い分布層をもつ理由は、つきのように推定される。
- ④ 当地方は、「エンボジリ類」のうち、「エンボージ」・「エンボージリ」などの長音化したものがあり、「ホーシ」を抽出しやすいため、「オガマ類」とのコンタミネーションが容易に行なわれた。
- ⑤ 「オガンボーシ」という特異な表現が方言生活にふさわしく、これが交通路にしたがって伝播した。ところで、伝播は、普通下流のひらけた地方から上流におよぶのが一般的とすると、「オガンボーシ」の本拠である<一字>に「イボジリ系」のあったことは確かである。
10. 逆に<宮浜>で「オガンボ」が分布層を形成できず、僻地に散在するにすぎないという理由は、つきのように推定される。
- ④ 当地方の「エボジリ類」は「エボジ」・「ベボジ」などで長音化したものでなく、「ホーシ」・「ボー」を抽出しにくかった。
- ⑤ 「オガマ類」が「オガマ」・「オガンマ」となり、「拝む」という意識を早く失い、鼻音化をおこしたりした。その結果、他の語系「エンマ」を派生したらしい。
- 注 「エンマ系」16参照
11. さらに、このような推定を他の地方で展開すると、海部川流域地方では、つきのようであったとおもわれる。
- ④ 当地方は「イボジリ系」が「エボジリ」<川上（檜木屋）>だったようで、「ホーシ」の抽出が困難だった。
- ⑤ 「オガメ系」が、「オガメ類」だったため、「オガン……」のようなコンタミネーションをもち得ず、「オガメトーロ（一）」のような別語を派生した。
- ⑥ 河川が短かいため、同じ流域については後読語系が早く奥地まで進入しやすく、語系の関係がむしろ単純だった。
- これは、本県の平地帯に複雑なコンタミネーションがみられないことにも通ずる。
12. また、<三好郡西祖谷山・三名・山城谷>など、県西部地方については、つきのような推定が可能ではなかろうか。
- ④ これらの地方は、「エンボージリ」のような長音のものもあるが、概して「エンボジリ」が多く、「ホーシ」の抽出がやや困難であった。
- ⑤ さらに決定的なことは、「オガマナトーサン」が「オガマ（ノ）トーサン」・「オガマ」と変化したため、「拝む」意識から「お鎌」への展開がみられた。このため、両者のコンタミネーションが成立しなかった。
13. これについて、さらに推定をすすめると、「オガマナトーサン」→「オガマノトーサン」は、微細な語形変化ではあるが、「拝まな通さん」→「お鎌の父さん」という語意上の実質的变化をもたらした点で注目される。分布図6をみると、<三好郡西祖谷山（吾橋・有瀬）>などではさらに、「オガマノトーサン」→「オガマ」のような簡略化がすすむとともに「鎌」の意識が決定的となるのである。
14. また、興味のあるのは、分布図3で明らかなように、<三好郡三名・西祖谷山>などから下流よりの地方に、「オガマノトーサン」とともに「カマカタギ」の分布することである。
- 「鎌をかたぐ」という表現は、「オガマノトーサン」・「オガマノトノサン」・「オガマ」などのもつ「鎌」の意識と「父さん」・「殿さん」などの擬人表現を通じて、容易に連想され得る擬人化ではなかろうか。
15. 前記地方に近接する<山城谷>についてみても、「カマカタギ類」・「カマカケ類」などの一般的使用の中で各部落の古老が、「オガマノトーサン」・「オガマノトーロー」など、いわゆる、「お鎌の……」式俚言を伝えている事実は注目される。
16. 県下に散在する、「カマカケ類」・「カマカタギ類」などが、どのようにしてできたかについては、それぞれの場合について考察せねばならないが、前記の推定から「オガマ系」の「オガマ類」からも派生し得るという可能性は十分にあるのではなかろうか。
- このことは、「オガメ類」の多い海部郡や、「オガンマ」を派生した那賀川中流地方に、「カマカケ類」・「カマカタギ類」の皆無であることと考え合わせて興味深い。
- なお、この問題については、「カマカタギ」・「カマカケ」などの全国的分布傾向が、「オガメ系」地方の内側にあるらしいことを、くわしく追究する必要があろう。

17. 本県の問題にかえるとして、「オガメ系」の進入が困難だったと思われる。<那賀郡木頭・沢谷>などの「カマカタギ類」については、後考の要があるが、当地方の特殊な状況を二、三指摘すると、つぎのようである。
18. <沢谷(岩倉)>は、第二次大戦中の配給制度実施以前は、すべての物資を<麻植郡木屋平>より導入しており血縁関係も多い。そして、<木屋平>は、「オガメ系」地方であることは前記の通りである。
- ちなみに、<岩倉>と下流の沢谷村内が車両連絡できるようになったのは、1958年(昭和34年)である。
19. <沢谷(高野)>は、「ホトケ系」の<勝浦郡福原>に近く、峠交通の要路にあたっている。当地は、「オガメ系」より後から伝播した「ホトケ系」が定着しているほどだから、当然、「オガメ系」の影響もあったはずではなかろうか。
20. <木頭(平)>は、いわゆる平家部落として祖谷地方(「オガメ系」)からの移住開拓の伝説があるが、その真偽はともかく、木頭村内では長い間、比較的孤立していたようである。
- 「カマキリの俚言」についても、祖谷地方と同じく「エンボジリ類」を用いており、村内の「イボジリ類」とは異なっている。
21. 以上、「オガメ系」と関連して、「カマカタギ類」・「カマカケ類」におよんだが、その当否はともかく「カマキリ」以前の、いうなれば「古いカマ系」の派生する可能性が本県にはあったのではなかろうか。それも、柳田氏の指摘するように、そう古い時代ではなく、「オガメ系」と「ホトケ系」の間ににおいてである。これについては、今後とも十分調査して補正してゆきたい。

#### (5) 「オガムシ類」

1. 「オガムシ」<三好郡三郷(影野)>、「オガ」<海部郡川上(寒カ瀬)>は、ともに、在地の古老が伝えるものである。
2. これらは、いずれも、「オガメ系」の分布層の中または近辺にあるが、用例が少ないので「オガメ系」の簡略化によるものかどうかは、よくわからない。
3. あるいは、本県山地部で使用される、「オガ」—「大鋸」を、「カマキリ虫」にみたてたのかもわからない。  
ちなみに、「オガ」は、平地部で「オガクズ」—「鋸屑」のように用いられるか、単に「オガ」だけで「鋸屑」の意味にもなっている。
4. また、「オガ」・「オガムシ」は、中央山地をのぞく各地で、「かめ虫」の俚言としても用いている。いろいろなことばと同音衝突するために、結局、「カマキリ虫」の俚言として広い範囲には固定しなかったのであろう。

#### (V) 「エンマ系」

1. 「エンマ系」も、「トーロー系」と同じく、俚言が少ない。

つぎのようなものがあるが、一括して考察していく。

注 1, 表6参照

2, 分布図2・7参照

[表6]

	語類	俚言
1	エ　ン　ヤ	エンマ・エンマサン・エンマハン・エンマノトーサン
2	ヤ　ン　マ	ヤンマ

2. 分布状況をみると、「エンマ類」は那賀川中下流を中心にして、勝浦郡、海部郡の一部にまたがっている。  
これに対し、「ヤンマ類」は、県北二カ所に散在し、一部年配層が知っている程度である。
3. もっとも、依頼調査によれば、「エンマ類」が県北地方にも少用されるらしいとの報告はあったが、現地調査の結果は、いずれも否定的で、結局確認できなかった。
4. したがって、県東南部よりに密集した特徴のある分布相の解釈も、「エンマ系」の形成過程とともに追究されねばならない。
5. 「エンマ類」は、「カマキリ虫」の怒りやすい性質から、「エンマ大王」を連想した命名である。』とする見

かたが多いが、その当否はともかく、「エンマ類」が、なぜこの地方に限って分布したのであろうか。

6. 「エンマ類」については、二つの面が考えられる。すなわち、新語系として、本県に進入したか、または、本県内にある、他の語系から派生したかである。

7. そこで全国方言辞典、その他によって、「カマキリ俚言」をしらべたが、「エンマ系」のものは皆無であった。したがって、本語系は、本県内で派生したものと、一応考えられる。

8. 「エンマ系」の派生について問題となるのは、「ホトケ系」との関係である。分布図2・8によると、「ホトケ系」は県北部と県南部とに分布層があり、「エンマ系」によって、那賀郡で大きく分断されている。

9. また、勝浦川、日和佐川の各流域地方では、「ホトケ系」の下流より地方で、「エンマ系」が共存しており、とくに、海部郡赤河内では、「ホトケ系」が「ホトケンバ」、「ホトケムシ」、「ホトケサン」などの変化をおこしている。

10. これは、阿波郡柿島の場合も同様であるが、「ホトケ系」分布層の後辺地区や他の語系との共存地区で「仏の馬」という奇異な概念が理解されにくくなつた結果の簡略化であろう。

「エンマ系」も、同様な原因から、「ホトケンマ」の「仏」に対応して、前記5の連想が作用し、類似音の「エンマ」が派生する可能性もでてくる。

注 「ホトケ系」14~21参照

11. しかし、このような推定は、「エンマ系」がなぜ、那賀川水系地方に主として分布したかという必然性をつくものではない。こうみると、「エンマ系」の語構成は、単に「ホトケ系」ばかりではなく、先行の他の語系と関連することも当然考えられよう。

12. これについて、興味のあるヒントをしめしているのは、那賀郡宮浜の分布相である。当地方では「エンマ」を主として用いるが、年令層・地区によっては、「オガメ系」、「イボジリ系」などの先行語系も用いている。

13. 「エンマ系」が、那賀川水系地方だけを選上した原因是、これら先行語系が、かつて分布層を形成していたとおもわれる網状組織の上で形成され、伝播したことによるのではなかろうか。

14. そこで、分布図4より「イボジリ系」をみると、那賀郡宮浜は「エボジリ類」があり、「エボジリ」、「エボジ」、「ベボジ」などが散在している。このうち、「ベボジ」が最下流にあるところから、下流地方には、「エボジ」の類もあったとみてよい。

15. また、分布図6より「オガマ類」をみると、「オガマナトーサン」、「オガマ」、「オガンマ」などがあるが、最下流は「オガンマ」になっている。

16. したがって、「エンマ系」の形成には、つきのようなコンタミネーションが想定されそうである。

エボジ  
オガンマ } → エンマ

すなわち、「エボジ」、「オガンマ」が共存しているうちに、「カマキリ虫」の個性に、よりふさわしい表現の「エンマ」が派生したのではないか。そして、「エンマ」の形成を動議づけたものは、「オガマ系」のもつ「拝む」という意識と、「エンマ系」に相前後して、本県に進入してきた「ホトケ系」という宗教的感覚だったとおもわれる。

17. 前記コンタミネーションの想定をささえる他の理由は宮浜における「オガンボ」の形成である。すでに、「オガンボーシ類」で述べたように、これもまた、「エンマ系」同様、「イボジリ系」と「オガメ系」とのコンタミネーションであった。こう考えると「エンマ系」が県北部で、分布層を持ち得なかった理由も、コンタミネーションの様式の差によるとみる時、容易に理解されるのである。

注 「オガンボーシ類」7参照

18. これを図示すると、つきようである。

① 県北部

「オガマ類」 } → オガンボーシ ◎  
「エンボジリ類」 } → (エンマ) → ヤンマ △  
エンボージ

② 県南部

「オガマ類」 } → エンマ ◎  
「エボジリ類」 } → オガンボ△  
エボジ

19. つまり、両地方は、ともに「エンマ系」と「オガンボーシ類」を派生する可能性があったのだが、県北地方では「オガンボーシ類」が主導権をとり、県南地方では「エンマ系」が勝利をしめたのである。

20. 本県の南北両地方で、ともに「オガソボ」、「ヤンマ」が散在し、稀にしか用いられない理由は、方言生活に適していたか、どうかによるとおもわれる。語意の明確さや、その時代にふさわしい即物的表現が、大きな要素となるわけである。

21. 「エンマ系」が「オガソボーシ類」と同じ要素から形成されていて、ただ、コンタミネーションの様式が異なるということを考えると、「エンマ系」と「ホトケンマ系」との前後関係も、ほぼ解明されそうである。

22. すなわち分布図2を見ると、「オガソボーシ類」は「ホトケ系よりも上流地方に分布している。これは、一応「ホトケ系」進入以前に「オガソボーシ類」が派生していたことをしめすものであろう。

このような形成・伝播の時期は、地方によって多少異なるが、同じ推定が可能ならば、「エンマ系」もまた、「ホトケ系」より先に派生した語系とみてよいであろう。

23. すると、「エンマ」は「カマキリ虫」の俚言としては、後続の「ホトケンマ」以上に強力だったのであろうか。分布図2・8からみて本来、「ホトケ系」に属するはずの那賀川下流地方において、「ホトケ系」の進入を許さず、これを南北に分断しているのである。

注 もっとも、<海部郡赤河内・宍喰>の「ホトケ系」は那賀郡を南下していたのが分断されたのではなく、直接海郡に進入したとみてよい。というのは海部郡は従来阪神地方その他と直接の関連があり、言語生活上にも接続助詞「サカイ」、「ヨッテ」断定助動詞「ヤ」などを用いることは周知のとおりである。「ホトケ系」部の定着も同様とおもわれる。

24. これは、「カマキリ虫」の闘争的な個性が、「ホトケンマ」という名称よりも「エンマ」の方に、より強く示せること、あるいは、時代とともに、「ホトケンマ」つまり、「仮の馬」という概念が失われやすいかであろうか。

25. 県北地方の「ホトケ系」地方において、「エンマ」があるらしいという依頼調査の報告もある、あるいは、「ホトケンマ」→「エンマ」という類似音による変化に加え、前記(24)の理由が作用するとおもわれる。

<勝浦郡横瀬・高鉢>などの「エンマ系」も、一部年配層は使用すると答え、他の年配層は使用しないと答えるのであるが、その在否はともかく那賀郡に接する当地方の複雑な状況をしめしているのではなかろうか。

26. なお、「エンマ系」が、県西部や海部川流域などに派生しなかった理由は、「オガソボーシ類」が派生しなかった理由と全く同じとみてよい。

注 「オガソボーシ類」11参照。

27. 同様に、「エンマ系」が、前記<宮浜>より上流の那賀川水域に伝播しなかった理由も、分布図の上で理解されねばならない。

すなわち、<宮浜>より上流は、いわゆる<木頭・坂州木頭>とよばれる地方で、ことに交通が不便だったため、「エンマ」の遷上が困難だったとおもわれる。

28. さらに、決定的な理由として、<宮浜>に接する、<平谷・坂州>両地方が、ともに「オガメ類」であり、下流の「オガマ類」と異なっていたこと、および、「イボジリ系」が比較的多用されていて、しかもこれが「イボジリ類」、「ヨボジリ類」だったため、「エンマ」へのコンタミネーションが成立しなかったこと、などであろう。

29. ちなみに、柳田氏が「エンマ」に言及され、『或は「イボムシリ」からの脱出かもしれない』と指摘されているのは、前記のコンタミネーションと考え合わせて意味深いものがある。

#### (VI) 「ホトケ系」

1. 「ホトケ系」は、俚言が比較的少なく、「ホトケンマ」を中心である。

一応つぎのようにまとめられるが、一括して考察していく。

注 1. 表7参照

2. 分布図2, 8参照

[表7]

	語類	俚言
1	ホトケ	ホトケムシ、ホトケサン、カマキリホトケ
2	ホトケンマ	ホトケンマ、ホトケンバ

2. 分布層をみると、つぎのような特徴があるので、順次検討していく。
- ① <徳島市>近辺には分布しない。
  - ② 県北地方に広い分布層をもつが、海部郡には散在する程度である。
  - ③ 那賀川水系地方には分布しない。
3. <徳島市>周辺には、「カマキリ」しかなくその状況分析については、すでに前記した。  
注 「カマキリ類」3参照
4. 分布図から明らかなように、「ホトケ系」は、「カマキリ類」をのぞくと、「エンマ系」とともに俚言分布層の最外辺部にあり、本県の主要町村に分布している。つまり、本語系は、「カマキリ類」をのぞいた語系中では、もっとも新しいものの一つといえよう。
5. 「ホトケ系」が海部郡に少なく、県北部に多いという分布相は、ことばの伝播状況について、いろいろなことをものがたっている。
6. すなわち、海部郡は小河川の分岐した、いわゆる「河内」の地形が多い。このため河川の上下交通はともかく、山をへだてた横の連絡が不便であった。  
したがって、新語系が侵入しても、横に拡大しにくい。  
また、海岸地方に住む人々の多くは漁業関係者で、およそ、「カマキリ虫」の名称などには縁遠い関係である。
7. これに対し、県北地方は、徳島市を主として吉野川沿岸に大集落地が多い。これが各支流の集落地と連絡して、本県の産業、経済、文化、交通の中心をなしている。  
人体にたとえると、徳島市は脳中枢であり、沿岸集落群は背臍中枢である。相互関係は、「藍玉」・「阿波三盆糖」・「養蚕」などの歴史以前から緊密だったとおもわれる。  
ことばは、このような「網状組織」を容易に伝播していくことができたのであろう。  
「ホトケ系」に先行した他の語系も、おそらく、これと同じ状況で伝播したはずである。  
たとえば、「オガメ系」をみると、県北部の場合、長大な河川の最上流部に分布するに足し、那賀川流域では中流よりの地方に停滞している。そして、海部郡では、いまだに海岸線に定着しているのである。  
総じて旧語系が目立つのは、つねに県南地方であり、このことは、徳島県の方言全般についてもいえそうである。
8. さらに、「ホトケ系」の伝播は、先行語系のあり方にも左右されることはある。  
県北部は、多くは「オガメ類」だったようで、「オガマナトーサン」・「オガマ」・「オガンマ」の残存がこれをしめしている。これら「オガメ系」は、一部地方で派生した「オガンボーシ類」をのぞき、「ホトケ系」の強い力に圧倒されている。これに対し、県南部は簡明な「オガメ類」が主で、前記の地理的状況とあいまって、「ホトケ系」の進入に対抗し得たのであろう。現在、海部郡で散在的に「ホトケ系」の定着している地点は、なんらかの意味で、「オガメ系」の勢力が弱かったためであろうが、一つは高知県に近く、他の一つは、「オガメ系」、「エンマ系」などの共存する那賀郡よりの地方であることも興味深い。
9. 「ホトケ系」の伝播状況は、那賀川水系地方で、いっそう注目される。はるか上流の<那賀郡沢谷（高野）>に「ホトケンマ」があるが、下流地方には全然みられないという現象である。
10. これは、当地（高野）が、<勝浦、那賀>の両郡山地に信仰のあつい「黒滝寺」参道に接し、両地方を結ぶ主要交通路にあたることと、從来、<勝浦郡>との血縁関係が多いためであろう。
11. 那賀川下流地方に「ホトケ系」のないのは、これに対応する「エンマ系」が分布するためである。「ホトケ系」は「エンマ系」により分断された分布層を形成しているが、これについては、すでに前記した。  
注 「エンマ系」21~23参照
12. なお、「ホトケ系」を具体的にみると、「ホトケンバ」<勝浦郡福原（八重地）>・<海部郡赤河内（西河内）>は、それぞれ年配層が訛って用いている。<「ホトケムシ」<海部郡赤河内（大戸）>や「ホトケサン」<海部郡赤河内（白沢）>などは、「ホトケンマ」が在地の「オガメ系」・「エンマ系」と共存しているうちに、原意がぼやけて変化したものであろう。
13. これに対し、<阿波郡柿島>の「ホトケムシ」は、「ホトケ系」分布層の最後尾地方にある。おそらく「カマキリ」の一般化について語意がぼやけた結果の簡略化であろう。また、「カマキリホトケ」<勝浦郡福原（日浦）>は「ホトケンマ」と「カマキリ」との簡単なコンタミネーションであることは、いうまでもない。
14. ところで、「ホトケ」系の解釈については、いろいろな俗信があるが、その二三をしめると、つぎのようなもの

がある。

- ④ 仏（死者の靈）の使いだから殺すな。
- ⑤ 仏（死者の靈）の乗る馬だから殺すな。
- ⑥ これが墓の近くにいると、新仏ができる。つまり、誰かが死ぬ。

これらが、「ホトケ系」の命名に關係があるかどうかはよくわからない。

15. これに関連し柳田氏は、「ホトケ系」について、つぎのように述べられている。

『「ホトケ」は死者の靈のこと、精靈と同じである。どうして此虫を死者の乗り物と見たかは、実は明瞭に説明することが難いが、或はただ盆の頃に出て来るというだけで無しに、蠍蟻の挙動が遲鈍で、いつ迄も一つ所にじっとしているのを、盆の瓜茄子の芋稚を脚とする馬の、少しも歩まぬのによそえたものでは無いか。』

16. 本県の農山村においても、「カマキリ虫」が「盆」または、「彼岸」頃、（墓地の）雑草の中などに多く出没するとの見かたは一般的であるが、柳田氏のいわゆる、「挙動遲鈍、盆の茄子云々」という見かたは、あまりないようである。

17. それよりも、さらに注目すべきことは、「カマキリ虫」による比喩的な表現である。つぎのようなものが、本県にかなり広く分布している。

- ④ （カマキリのやせた）ヤセギス
- ⑤ カマキリのサンバンゴ
- ⑥ ホトケンマのサンバンゴ

18. 「ヤセギス」は、本来、「晚秋のやせたキリギリス」の意味であるが、「カマキリ虫」にも結びつけて、「やせた人」をますます誇大に表現している。もちろん、「カマキリのやせた人」を表現する場合もある。

「サンバンゴ」は、「三番子」と理解されている。つまり、「カマキリ虫」は一年に三回（あるいは三塊産卵すると一般に考えられているが、三番目の卵から孵化したものは、発育がきわめて悪く、たいそうやせているという俗信から、「やせた人」を揶揄したものである。しかも、「イボジノサンバンゴ」「オガメノサンバンゴ」とは聞かないでのある。

19. 「カマキリ虫」の体が他の昆虫に比して細いかどうかは主観的な判断にもよるが、とにかく、このような表現ができる上には、なんらかの理由があったはずである。つまり、「やせている（細い）」という感じが、「ホトケンマ」＝「カマキリ虫の名称」ということになる可能性がでてくるのではないかろうか。

20. では、吾々の周囲に、「仏の馬」と名のつく、しかも、細い形態をしたものはないか、ということになる。

21. 神社に奉納されている「神馬」ならともかく、「仏馬」というのはないようである。そして「仏の馬」と名のつく唯一のものは、葬送のさい時折用いられる小道具である。いろいろな慣行があるようだが、一般的には「仏の乗る馬」として喪家の入り口に置き、野辺送りの際、焼くかまたは墓標の傍に置くものとされている。葬送の小道具としてはすたれつつあるが、数本の藁か、細く割った竹でつくられた形態は、まさに「カマキリ虫」を連想させるものである。

22. 「ホトケンマ」は、このような形態類似の上に連想された命名ではなかろうか。

このような連想を可能にさせたものは、「カマキリ虫」が「オガメ系」の名称をすでに得ていたことであり、さらに信心深い庶民の態度と即物的な理解があつたことによるのであろう。

全国に散在する「ホトケ系」の地方は、「宮崎」・「壱岐」・「淡路」・「奈良」であるが、いずれも西日本にあり、「オガメ系」が共存するか、近辺に分布していることは興味深い。

23. 柳田氏の指摘や、一般的の俗信も「仏の馬」のもの、このような背景があって、いっそう理解されてくるのである。

#### （VII）「その他」

1. 前記語系の、いずれにも属さないものは、「ハイトリ（ムシ）」「ゲンバー」・「テンジンサン」などである。
2. これらは、すべて海部郡または、旧海部郡の<那賀郡木頭（折字・棚谷）>にある。
3. 「ハイトリ（ムシ）」<那賀郡木頭（折字・棚谷）>は北陸地方に多い名称であるが、本県の僻地でも用いていたようである。在地の年配層が伝えているので、今後、分布状況をたしかめたい。
4. なお「カマキリムシ」が「蟬」、「ばった」「ごきぶり」を捕食しているのは、時おりみかけるが、「蠍」を捕えることについては見聞しない。語意についても後考の要があろう。

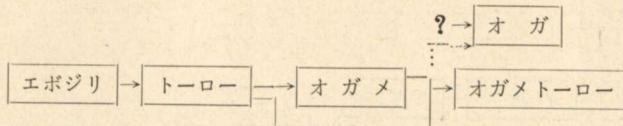
5. 「ゲンベ(一)」<海部郡宍喰(塩深)>の類も、北陸、関東に多いようだが、本県でも一部地区で用いている。在地年配層によればつぎのような童謡もうたわれたとのことである。
- ① ゲンベー拝め、茶飲まそノ
  - ② ゲンベー拝め、酒飲まそノ
  - ③ ゲンベー拝め、酒買え、通せノ
6. 「ゲンベー」の語意についてすでに柳田氏が指摘されているがはっきりした意味は今のところ不明のようである。これについても今後よく考えたい。
7. 「テンジンサン」は<海部郡浅川(浅川浦)>で「はたおりばった」と「カマキリ」とに両用しているようである。どちらが原名称であるかは不明であるが、いずれも、その動作から「拝む対象一天神さん」を連想したのであろう。当地方に「オガメ系」があるのも、この連想をいっそう容易にしている。
8. これらが、いつ頃本県に進入したのか、あるいは形成されたかはわからないが、分布層の定着状況をみると「ハイトリ(ムシ)」は比較的古く、「ゲンベ」がこれにつぐとおもわれる。  
また、他の語系の、どこに位置づけられるかは、今のところわからない。

### [III] まとめ

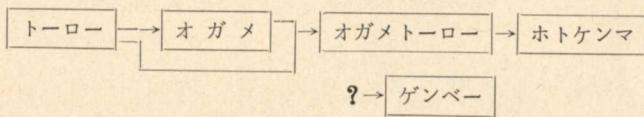
- 徳島県の「カマキリ俚言」について概観したが、以上の考察をまとめると、大体つぎのようになる。
1. 便宜上7語系に分類したが、実さいには、「カマ系」には「カマキリ類」よりも古い「カマカタギ類」や「カマカケ類」がある。
  2. 「カマンマ類」・「オガンボーシ類」・「エンマ系」などは、コンタミネーションによる、派生語類(系)である。
  3. 本県の「カマキリ俚言」は、つぎのような語系順で進入したのではなかろうか。
- イボジリ系  
トーロー系  
オガメ系  
エンマ系  
ホトケ系  
カマ系(カマキリ類)
4. これ以外にも、「ハイトリ(ムシ)」「ゲンベ(一)」など、かなり古いとおもわれる俚言もあるが、くわしいことは不明である。
  5. 各地方における語系・俚言を、推定できる範囲でしめすと、大体つぎのようになる。

#### イ) 海 部 郡

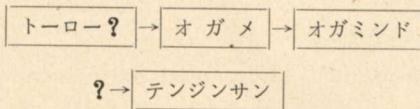
① 「川上」



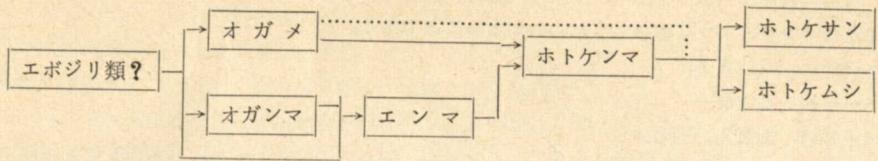
② 「宍喰」



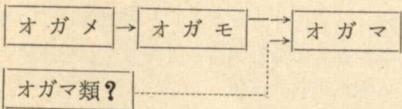
③ 「浅川」



④ 「赤河内」

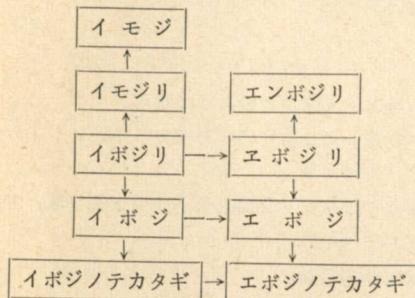


⑤ 「由岐」

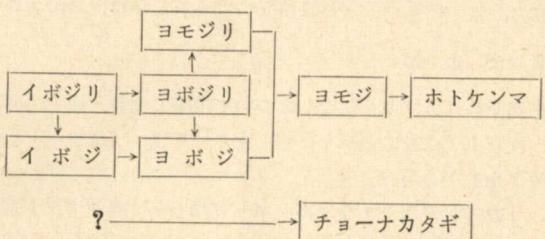


ロ) 「那賀郡」

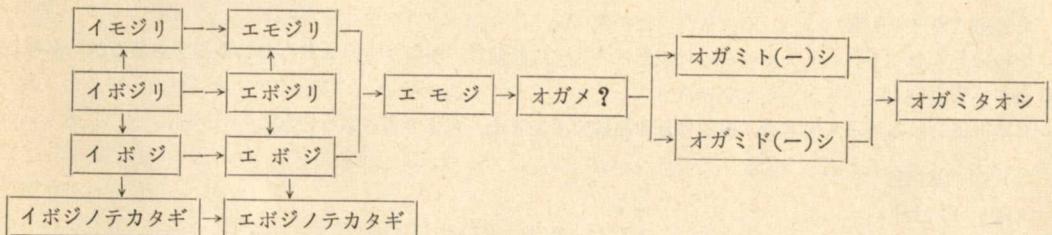
① 「木頭」



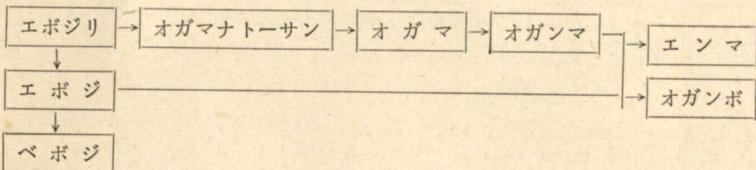
② 「沢谷」



③ 「平谷」

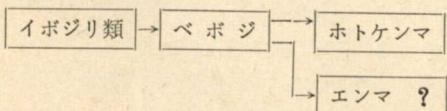


④ 「宮浜」



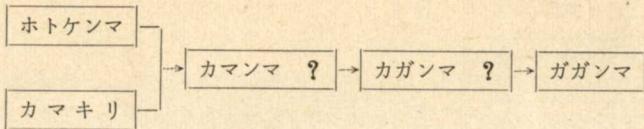
ハ) 勝浦郡

「福原, 高鉢」



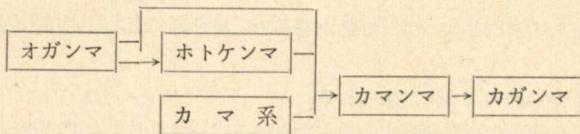
ニ) 名東郡

「佐那河内」

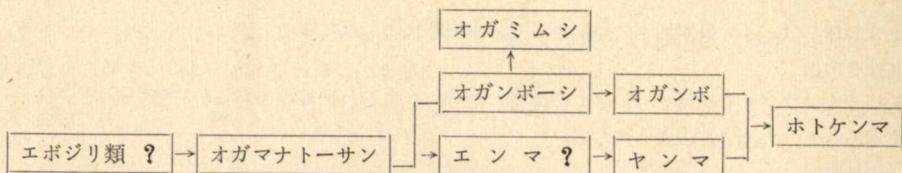


ホ) 美馬郡

「江原, 岩倉」

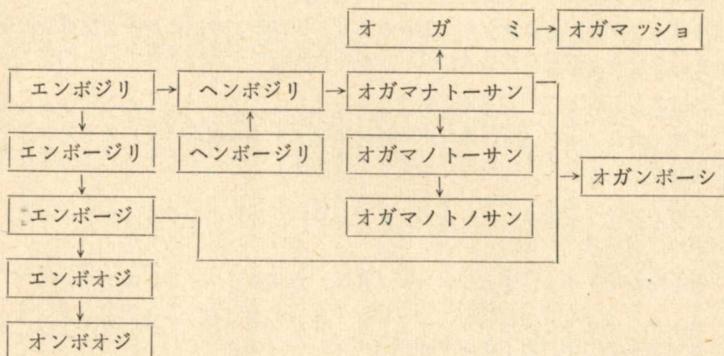


「一字」

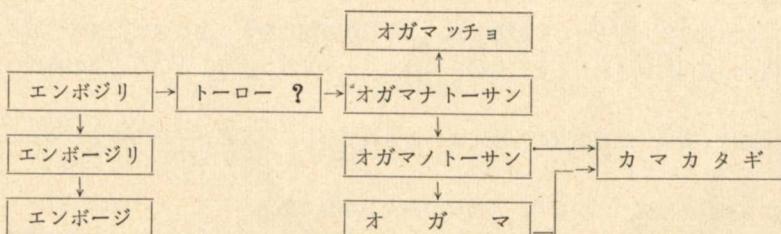


ヘ) 三好郡

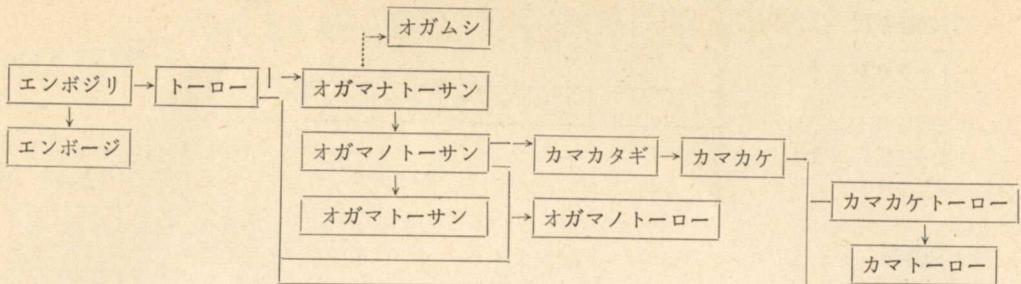
① 東祖谷山



② 西祖谷山, 三名



③ 山城谷、三繩



7. 「トーロー系」については「複合トーロー」を形成した、<三好郡山城谷><海部郡川上>などは系統図にしましたが、その他の地方では一應省略した。

8. 語系の変化度は、海部郡が比較的単純で、かつ遅いようにおもわれる。

以上かんたんに表記したが全語系を通じ、もっとも大きな影響力をもったものは、「オガメ系」であることがわかる。

〔Ⅲ〕 「カマキリの卵」の俚言

1. 「カマキリの卵」は、「於保知加不久里」として、平安時代の文献にみえている。

注 和名抄その他

2. 本県でも、「オジフグリ」をはじめ、多くの俚言があり、それぞれに興味のある分布層を形成している。

3. これをまとめると、大体つきのようになる。

注 1. 表8参照

2. 分布図10参照

〔表8〕

	語 来	俚 言
1	フ グ リ	オジャフグリ、オジフグリ、オジウグリ、オジホグリ、オジーノフグリ、オジノフングリ、ジーノフグリ、ジーノフングリ、フグリ、カガンマノフグリ、マツフングリ、ホクロ
2	キ ン タ マ	オジーノキンタマ、ジーノキンタマ、サルノキンタマ、ホトケンマノキンタマ、ヤマノカミノキンタマ、エンボージノキンタマ、ヨボジ(リ)ノキンタマ、イボジ(リ)ノキンタマ、エボジ(リ)ノキンタマ、エンマノキンタマ、キンタマ、バーノ……?
3	イ ボ ジ リ	エンボジリ、エボジ、エンボジ、エンボジー、エンボンジリ、エンボーズ、エンボー、ベボジ
4	イ エ	ホトケンマノイエ、オガンボーシノイエ、カマキリノイエ、エンマノス
5	ア ワ	ホトケンマノアワ、ホトケンマノアオ、オガンボーシノアオ、カマキチノアワ、カマキリノアオ、ホトケンマオバ(ハン)
6	ヨ ー ダ レ	エンマノヨーダレ、ヨーダレクリ、ネブリコ、ネブリ
7	そ の 他	ジーノシリスケ、オガマ

4. このように多くの俚言があるのは、「カマキリの卵」が、なんらかの関心をよびおこさせたからである。

5. その一つは、これが種々の薬用に供されたこと、他の一つは、「オオジガフグリ」という古語の特殊な名称によるのであろう。

6. 薬用としては、腎臓・結核・夜尿・幼児の涎の治療によいとされており、とくに、子供の涎をとめるのに著効があるとの俗信がある。

7. 一方、古語の意味は、「祖父の陰囊」、つまり、「祖父の睪丸」の意である。

「カマキリの卵」が「祖父の陰囊」に酷似していることから命名した即物的表現である。この即物的表現の奇抜さ

が新語発生の動機の一つとなつたわけである。

以下、各語系について考察していく。

### (1) 「フグリ系」

1. 分布図をみると、吉野川北岸山地の小分布層と、県南よりの大分布層とがある。

これは、従来、本県全土「フグリ系」だったものが、新しくできた語系によって分断されたのであろう。

2. 「オジャフグリ」<三好郡西祖谷山（吾橋・有瀬）>は、「オジガフグリ」に比較的近い訛語で、高知県より僻地に分布している。

3. 「オジフグリ」は、<那賀郡木頭>・<三好郡祖谷山>など、本県の中央山地に分布している。「フグリ系」のうち、もっとも代表的なものである。

「オジウグリ」<三好郡西祖谷山（徳善）>、 「オジホグリ」<三好郡三名（平）>などはその変化したものである。

4. また、「（オ）ジーノフグリ」が、<徳島市多可良・勝浦>・<海部郡宍喰>などに分布しており、那賀郡平地帯や海部郡では、「（オ）ジーノフングリ」のように鼻音化するのが一般的である。

5. その他、単独の「フグリ」<那賀郡平島・加茂谷>がある一方、「カガンマノフグリ」<美馬郡岩倉（平帽子）>や「マツフングリ」<海部郡赤河内（白沢）>、さらには、「ホクロ」<鳴門市北灘（櫛ノ木）>などの特殊なものもある。

前記<岩倉（平帽子）>では、「カガンマ」は「カマキリ虫」の名称だから問題ないが、「マツフングリ」・「ホクロ」などは、語意が失われて、他の類似語を連想したのであろう。

### (2) 「キンタマ系」

1. 「キンタマ系」は「フグリ系」に接して分布する場合が多い。つまり、「フグリ」は「陰囊」であるが、原意が失われはじめたか、もしくは、より即物的な表現を求める結果、「キンタマ系」が派生したとみてよい。

2. 「（オ）ジーノキンタマ」は、海部川上流・那賀郡中部、その他本県の広い範囲に分布している。

3. 「サルノキンタマ」<名東郡佐那河内（寺谷）>は、類似の連想であるが、「ヤマノカミノキンタマ」が<那賀郡相生（平野）>と<麻植郡三山（種野）>に遠く離れて用いられるのは、どんな意味であろうか。あるいは、山野の草木に付着する「カマキリの卵」を、山の神様がおき忘れた「墨丸」とみたのかもしれない。

4. また、「バーノ……？」のような俚言が海部川流域をはじめ各地にあるようだが、[確認できなかった]。一般には、「ジーノキンタマ、バーノ……？」のような短文形式で使用するようである。

5. さらに、「カマキリの俚言」と結合したものがかなりある。

「イボジ（リ）ノキンタマ」、「エボジ（リ）ノキンタマ」、ヨボジ（リ）ノキンタマ、「エンマノキンタマ」、「カマキリノキンタマ」などである。また単に、「キンタマ」だけで用いる場合も、<阿波郡>その他に散在している。しかし、「ホトケンマノキンタマ」が予想に反して少なかった。そういえば「オガメ系ノキンタマ」もないようである。まじめなことばや仏には「墨丸」がつかないので、敬意を表して用いなかったのかよくわからない。後記するが、「ホトケ系」地方に「アワ系」の多いのは興味がある。

6. 「キンタマ系」について考えられる、もう一つの問題は、これが、那賀川すじに多いのに反し、祖谷川すじに少ないことである。

これは、「カマキリ俚言」における「イボジリ系」とも多少の関係がありそうである。つまり、那賀川すじでは、「エボジ」、「イボジ」などから、「ジーの～」が発想されやすいのに対し、祖谷川すじでは、「エンボ（一）ジリ」から「エンボージ」、「エンボオジ」などになりやすく、これが、「オジフグリ」を、いっそう安定させたようである。これは本県山地が、「祖父」の場合「ジー」を用い「オジー」を用いないことと関連し合っているのである。

7. いずれにしても、「キンタマ系」は、その表現が直接的で、使用者、とくに女性に、いささか抵抗感を抱かせることはいうまでもない。

このような特殊性が、新語派生の大きな動機づけとなつたのであろう。

### (3) 「イボジリ類」

1. 「イボジリ系」は、本県における、もっとも古い「カマキリ俚言」の一つであるが、一部地方では、「カマキリ

の卵」の俚言に転化しつつある。<三好郡佐馬地、三郷、箸蔵(下野呂内)>、<那賀郡沢谷、坂州、平谷、宮浜>、<勝浦郡福原(八重地、田野々)>などでは、古老は「カマキリ虫」を意識する場合が多いのに、その他の者は、「カマキリの卵」と理解する場合が多い。

2. とくに、<三好郡山城谷>では、「イボジリ系」が完全に「カマキリの卵」の名称となっている。このような語意の変化は、これを起させた、なんらかの原因があるはずである。
3. 前記したように<三好郡山城谷地方>は、「オガメ系」より派生したとおもわれる、「カマカタギ類」、「カマカケ類」が多かった。
4. これらは、「カマキリ類」に類似した強力な語類だったため、「イボジリ系」は使用度が衰え、語意がぼやけてしだいに「カマキリの卵」の俚言へと変化したのであろう。
5. しかし、このような傾向を促進した要素が、別の面にもあったようである。それは、当地方の「カマキリの卵」の俚言が、「フグリ系」から「キンタマ系」に変化していったらしいことである。分布図10から明らかなように、「イボジリ系」分布層の中に、「キンタマ系」が残存していることは、変化の過程を物語っているのではなかろうか。
6. これと共に通した傾向が、那賀郡、勝浦郡などの山地にもみられるのは興味がある。<那賀郡平谷(市宇・中内)>では、「カマキリの卵」の名称が、年令層によって、つぎのように変化している。

注 表9参照

[表9]

年令層		カマキリ虫の俚言	カマキリ虫の卵の俚言
1	老年層	イボジリ	オジフグリ ジーノキンタマ
2	中年層	(イボジリ) オガミト(一)シ	イボジ(リ)ノキンタマ ジーノキンタマ
3	青年層	(オガミト(一)シ) カマキリ	イボジリ

7. つまり、「イボジリ系」は一方では新語系の進入により「カマキリ虫」としての語意がぼやけると同時に、他の方では、使用しにくい「キンタマ系」をさけるために、「カマキリ虫の卵」の名称へと転化していくのである。

#### (4) 「イエ系」

1. 「ホトケンマノイエ」・「オガソボーシノイエ」・「カマキリノイエ」などが、<美馬郡一字・八千代>などに分布している。
2. 当地方では、「カタツムリ」の貝殻部を、「デンデンムシ」の「イエ」のようにも用いているが、「カマキリノイエ」は、ちょっと不審な表現である。
3. 那賀川中流地方における、「エンマノス」も類似した表現である。
4. これらは、いずれも、「キンタマ系」に代るものとして派生したものであろう。

#### (5) 「アワ系」

1. 「アワ系」は、「カマキリの卵」が、その産卵初期において、泡状もしくは唾液状をなすことから発想された。即物的表現である。
2. 県北地方に限られるが、県南地方でも、「カマキリの卵」を説明するときに、「カマキリのアワのようなもの」といえば、年配層は直ちに理解する。
3. 分布図によると、「アワ系」は、吉野川をはさむ南北地方に、「フグリ系」や「キンタマ系」を分断する分布層を形成している。また、「アワ系」分布層の内部にも、「キンタマ系」が散在している。
4. これは、県北地方に一般的だった「キンタマ系」に代るものとして使用されはじめたのであろう。
5. 「アワ系」は、美馬郡以西で、「ホトケンマノアオ」のようになりやすい。
6. さらに、<美馬郡郡里・岩倉・江原>などの山地より地方では、「ホトケンマノオバ(ハン)」のように用いて

いる。「ジーノフグリ」・「ジーノキンタマ」などの擬人表現に類推したのであろうか。

#### (6) 「ヨーダレ系」

1. 「ヨーダレ系」は、『「カマキリの卵」を舐るか、または黒焼を服用すると、幼児の「ヨダレ（涎）」に効果がある』との俗信からの発想であろう。
2. 実さいに効果があるのかどうかは別として、「カマキリの卵」が、最初泡状もしくは唾液状だったものが、しだいに海綿状に固まるようすをみて、昔の人々は薬用に思いついたのではなかろうか。
3. 「エンマノヨーダレ」は、那賀川中流地方で用いられ、「ヨーダレクリ」は<海部郡三岐田・阿部>で用いている。
4. これに対し、「ネブリ」は<勝浦郡横瀬>に、「ネブリコ」は阿波郡に分布している。  
「ネブリ」の類は、「ヨダレ」をなおすために、これを幼児に舐めさせていたことからの命名であろう。
5. 「ヨーダレ系」も、「キンタマ系」に代るものとして用いられたことは、分布図からみてあきらかである。

#### (7) 「その他」

1. 「ジーノシリスケ」は、<三好郡井ノ内谷（駒倉）>・<麻植郡川田（奥ノ井）>で用いる。  
両地点は、距離がかなりへだたっており、しかも山間部にある。このような一致はどうして起りえたかは興味があるがよくわからない。  
「ジーノシリスケ」が「イボジリ系」と関連するように思われるが、今後の調査にまたねばならない。
2. 「オガマ」は<三好郡昼間（増川）>の古老が伝えている。「カマキリ虫」の「オガマ類」俚言の語意がぼやけて、「カマキリの卵」に転化したのである。三好郡西部の、「イボジリ系」の語意転化と類似して注目される。

#### (8) 「まとめ」

1. 以上、「カマキリの卵」の俚言について概観したが、これらの語系は、「フグリ系」を元祖としている。
2. 語系変化を促した最大要素は、「フグリ系」にかわる「キンタマ系」であった。
3. 「キンタマ系」にかわるものとして、各地で、いろいろな語系が用いられはじめたが、これが多くの語系を派生したのである。以下、大体をまとめると、つぎのようになる。

##### Ⓐ 三好郡祖谷山

「フグリ系」→「キンタマ系」（一部地方のみ）

##### Ⓑ 徳島市多可良・那賀郡木頭

「フグリ系」→「キンタマ系」

##### Ⓒ 三好郡山城谷・三繩

「フグリ系」→「キンタマ系」→「イボジリ系」

##### Ⓓ 阿波郡伊沢・海部郡三岐田

「フグリ系」→「キンタマ系」→「ヨーダレ系」

##### Ⓔ 美馬郡江原・名西郡上山

「フグリ系」→「キンタマ系」→「アワ系」

##### Ⓕ 美馬郡一字

「フグリ系？」→「キンタマ系？」→「イエ系」→「アワ系」

##### Ⓖ 那賀郡宮浜

「フグリ系」→「キンタマ系」→「イエ系」→「ヨーダレ系」

---

「カマキリ虫」および「カマキリの卵」の俚言について考察したが、このように多くの俚言が用いられていたことは、現代のわれわれにとって驚異である。

しかし、過去の時代と社会にとって、必要な関心事として注目されていたことを意味する。すなわち、昔の少年達にとっては、これらは、おもしろい玩具としてもあそばれたであろうし、大人達にとっては、涎、イボの治療、結

核、夜尿、腎臓などの薬として注目された。いわば生活必需物だったのである。

現在でも、山間部の年配層には、その少年時代に「カマキリ」をもてあそんだなつかしい記憶があるし、薬用として保存している家庭も多い。

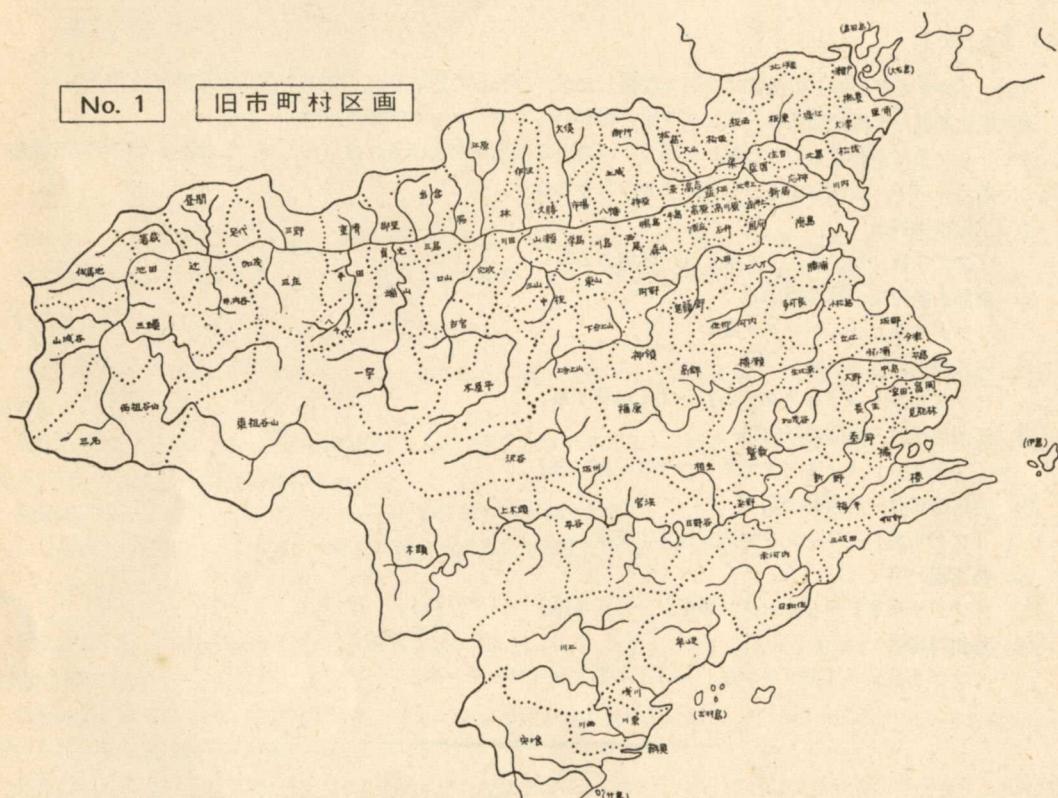
しかし、社会の進展とともに、「カマキリ虫」に関する多くの俚言と俗信、そして、なつかしい記憶も急速に消滅していくものとおもわれる。

これらをかき消していくものは、共通語的な「カマキリ」の一般化であるが、昔の人々が試みた生活の知恵に代るもののが、少年達にも、大人達にも、もたらされねばならない。

平和な遊びのよろこびを少年達に、そして、文化的な豊かな生活の楽しみを大人達にと願うものである。

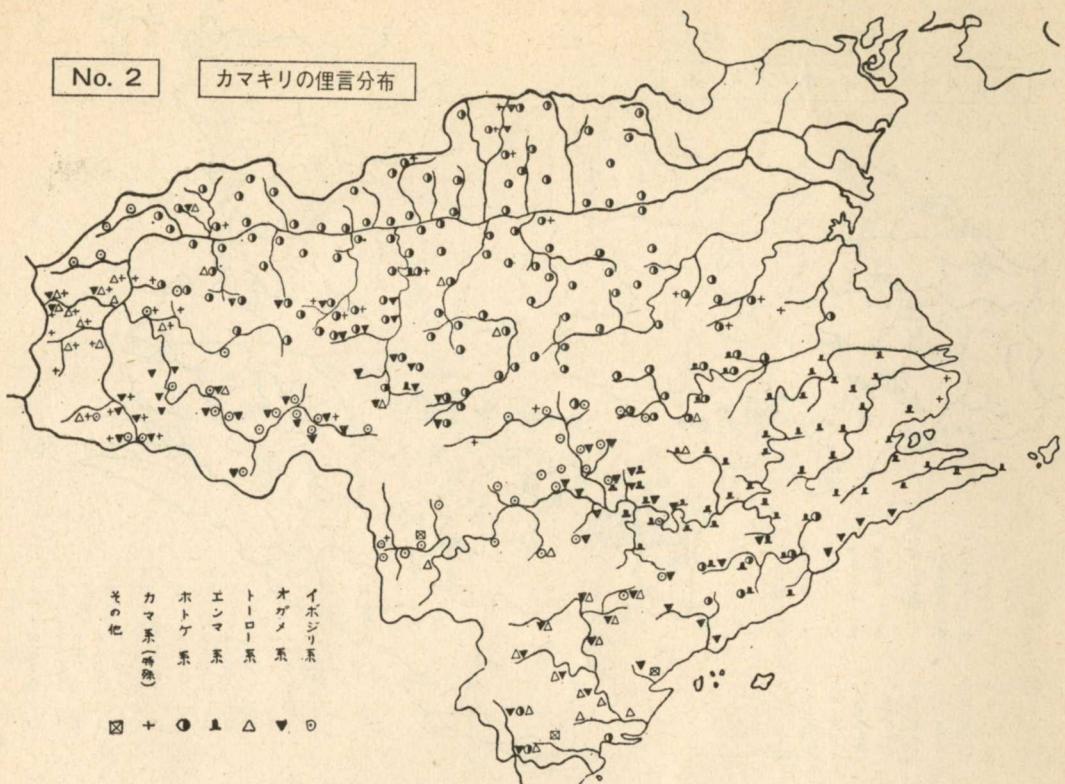
### あとがき

「徳島県のカマキリ俚言」について概観しようとしたが、十分にまとめることができなかった。勤務の都合で時間がかぎられたり、未熟なために分析不十分だったりで、統一的に考察しきれなかったと反省する。いろいろと不備な点が多いが、先輩や現地の方々の指導をうけて今後とも補正していきたい。この調査にあたり、直接協力してくださった県下の多くの人々、お年寄り、町村役場の方々、先生方、そして、親愛な中学・高校の諸君に心から御礼申しあげます。



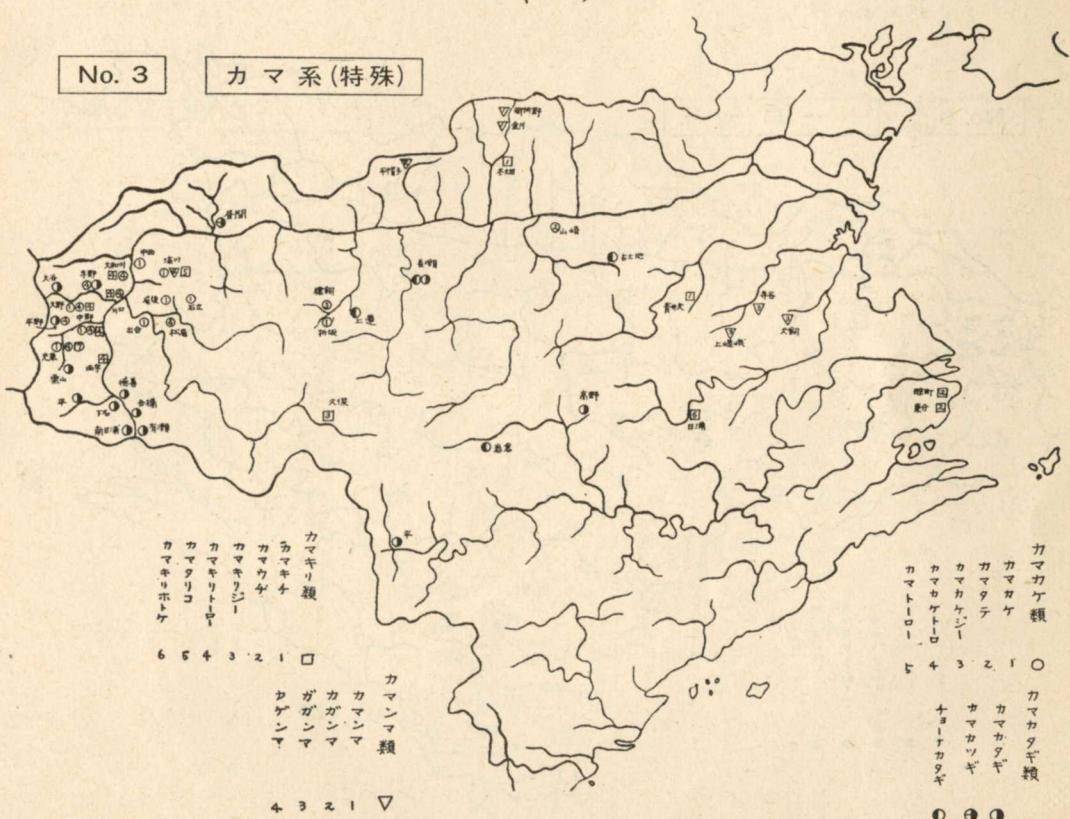
No. 2

## カマキリの俚言分布



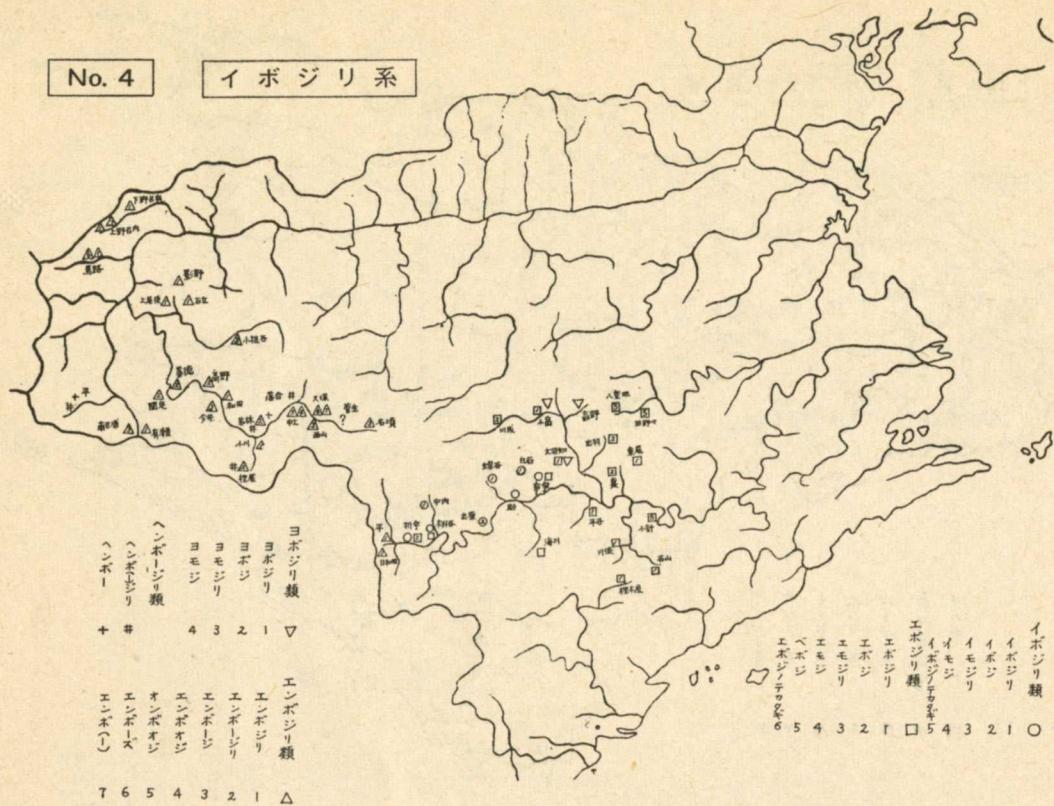
No. 3

カマ系(特殊)



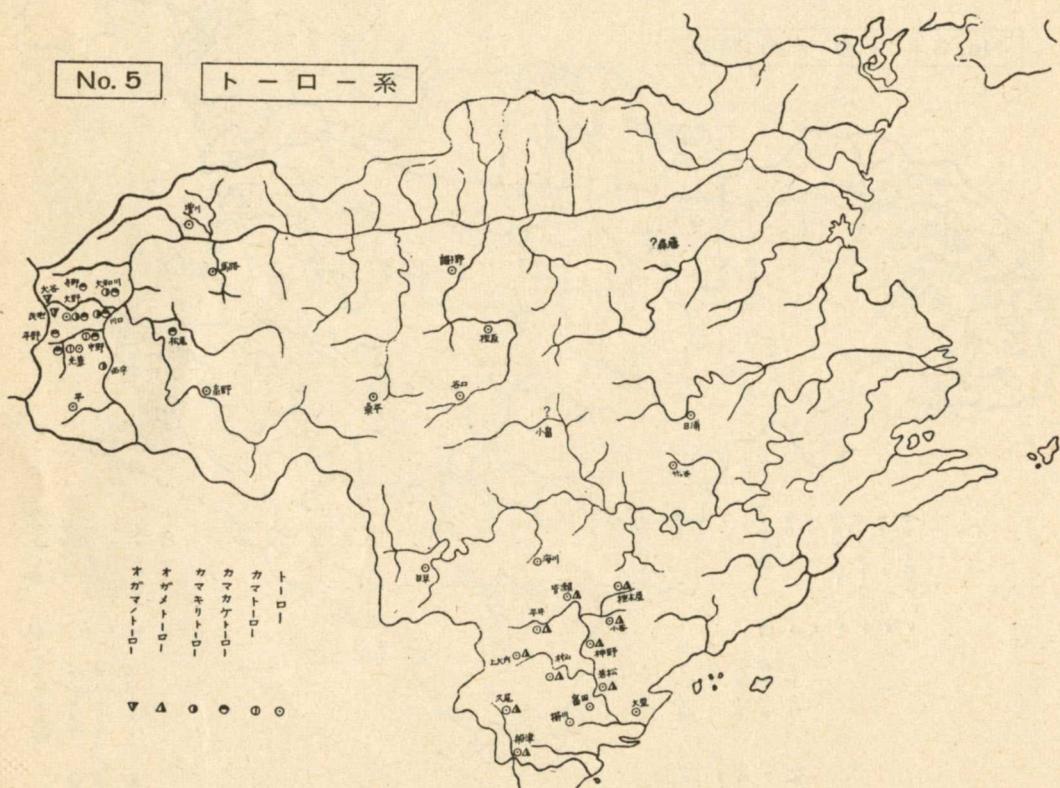
No. 4

## イボジリ系

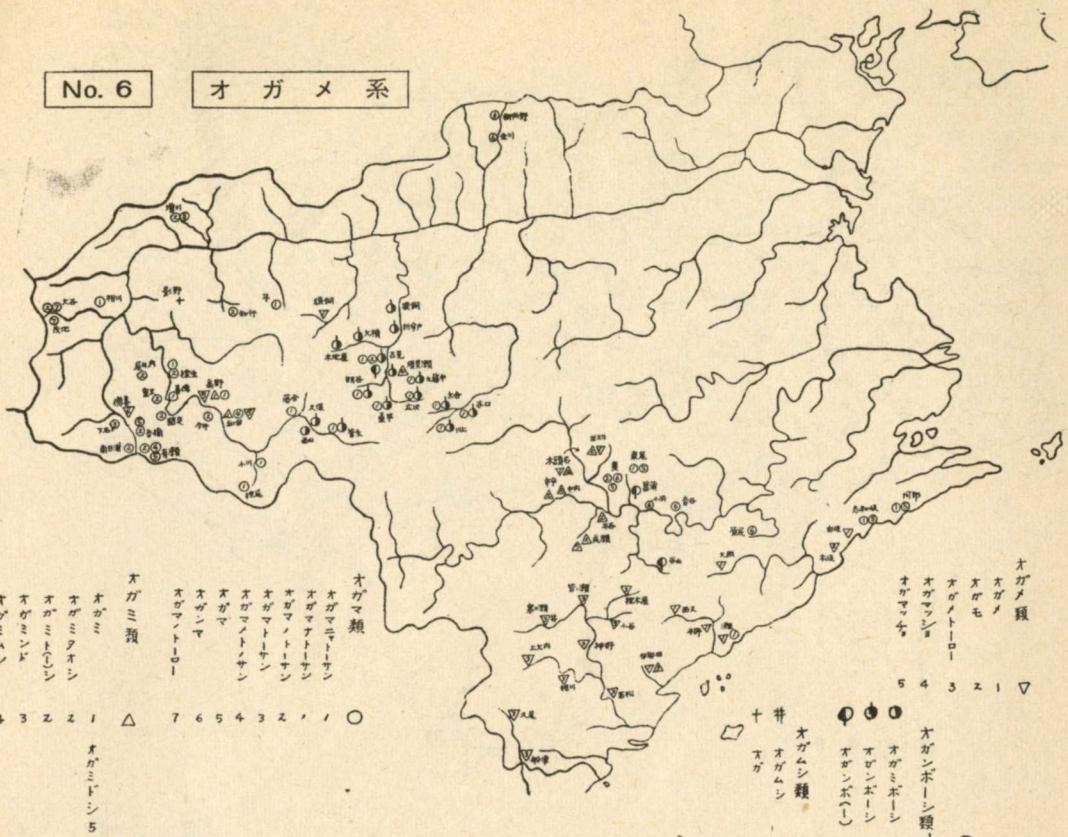


No. 5

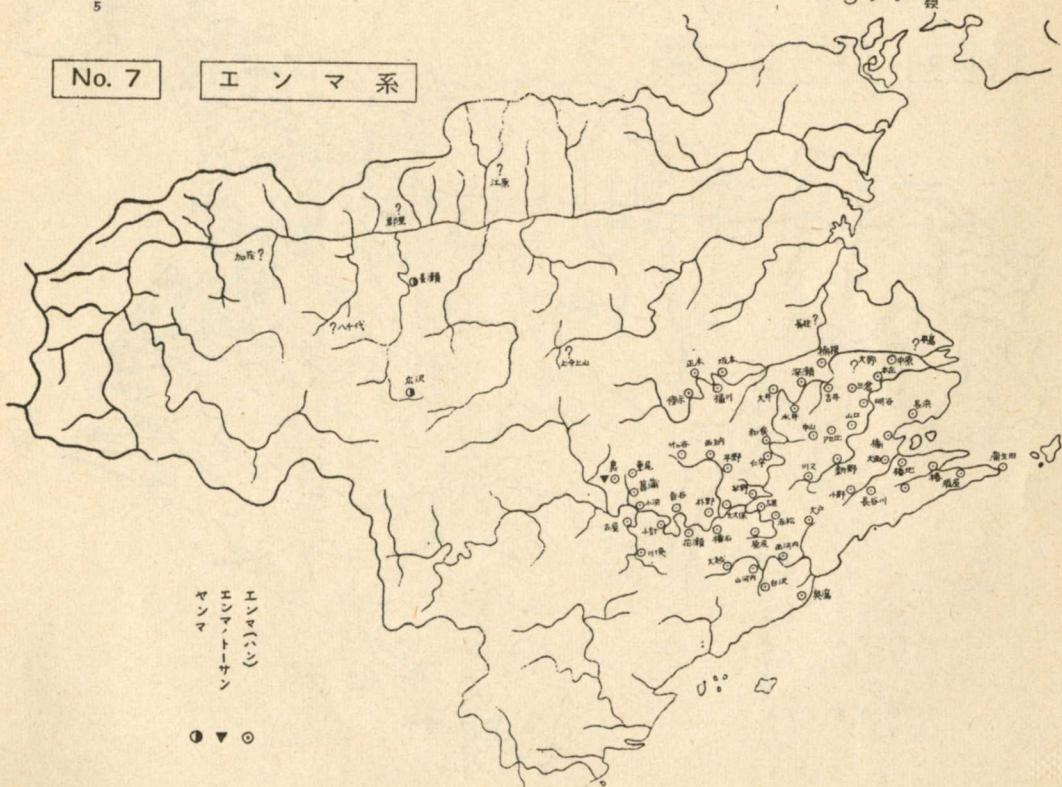
## ト－ロ－系



No. 6 オガメ系

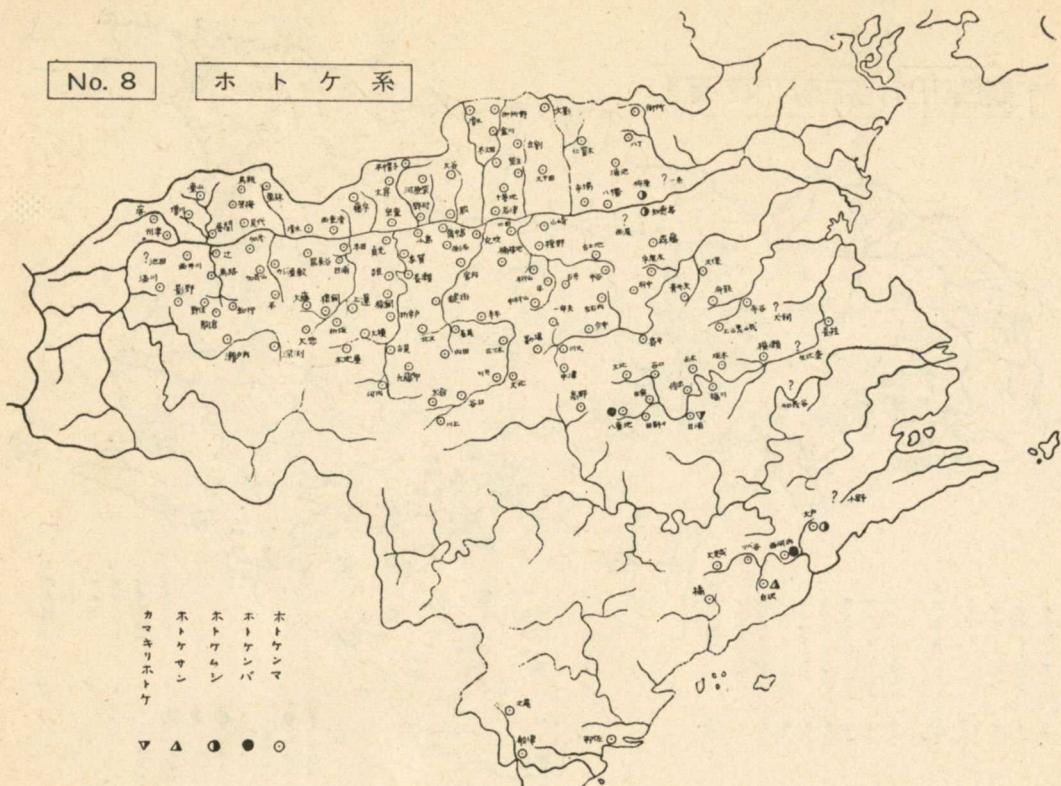


No. 7 エンマ系



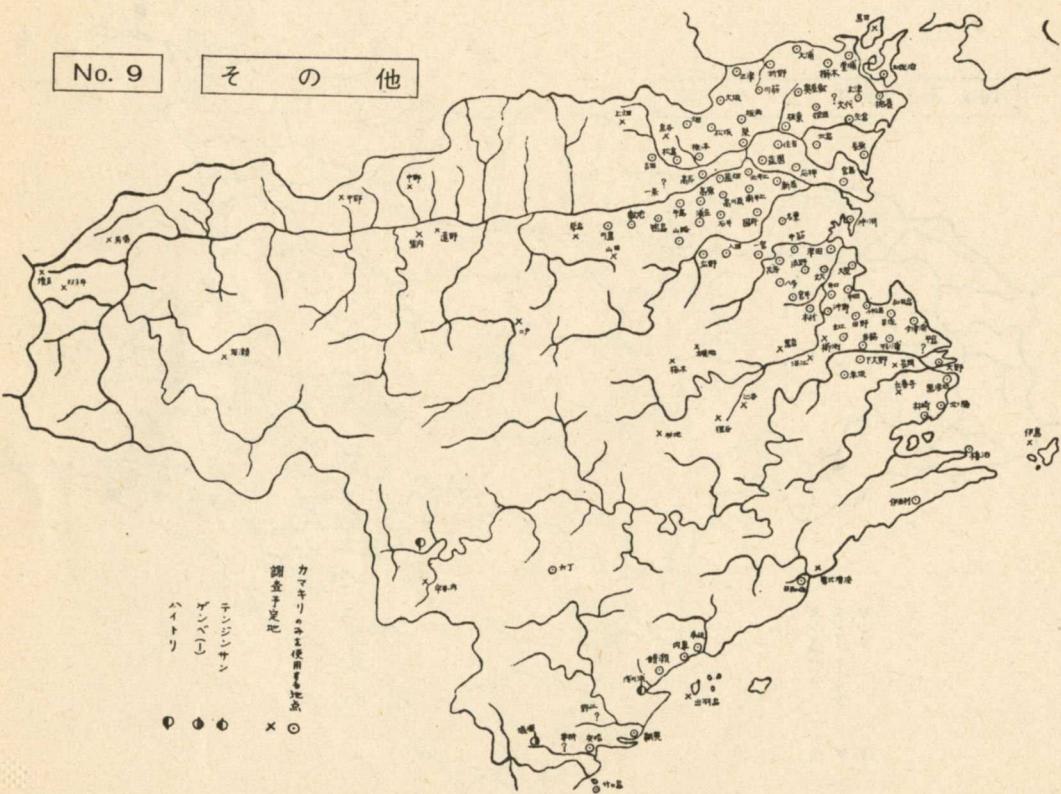
No. 8

## 木トケ系



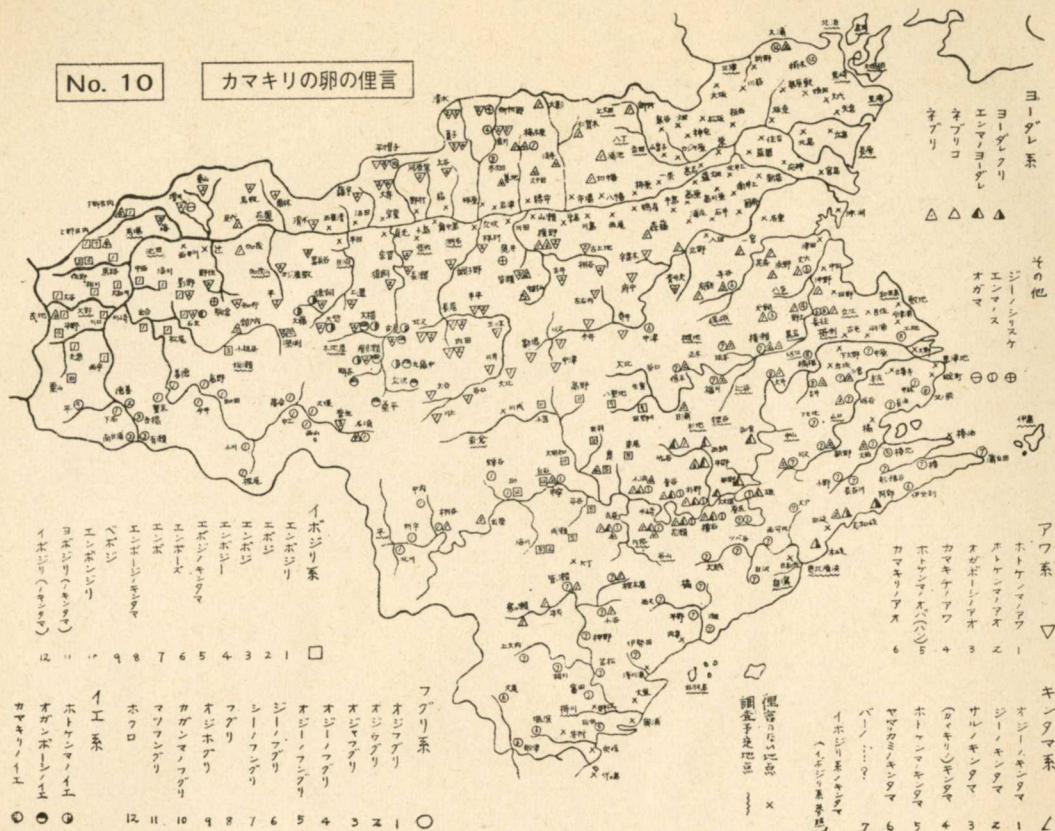
No. 9

## その他の



No. 10

カマキリの卵の俚言



127066



81

M

行

1001